

# 古史傳

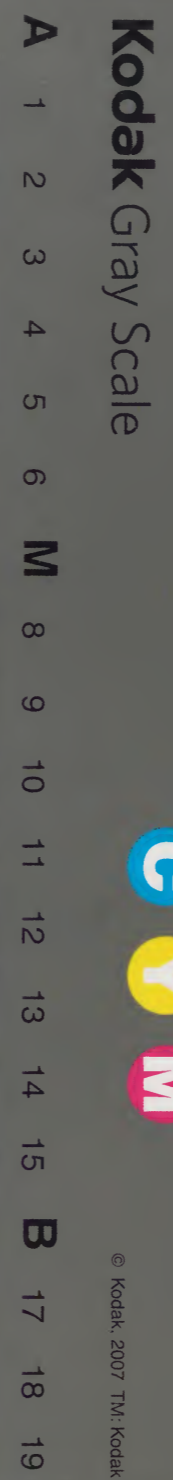
自第九十九段  
至第百五段

## 二十

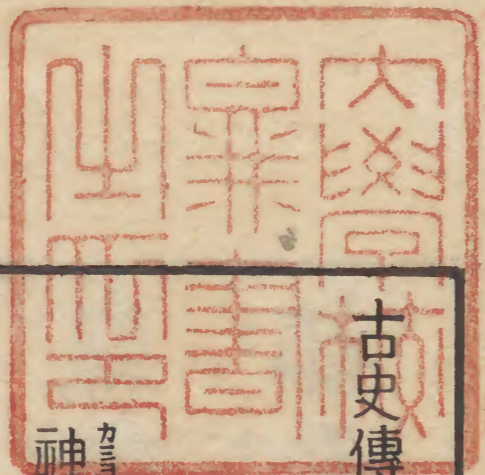
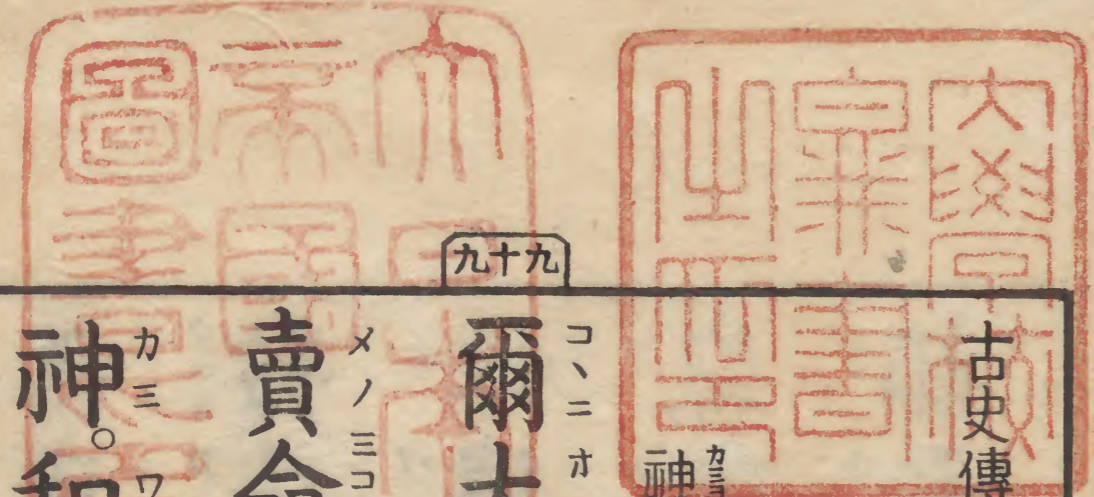
和書門			
類	號	函	架
一	五〇九	二	三〇
二	二	二	二
冊	架	函	架

內閣文庫			
類	號	冊	函
一	五〇九	二	二
二	二	二	二
冊	架	函	架

內閣文庫	
番號	和 15091
冊數	22 (20)
函號	269 105



Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side. The text is extremely faint and difficult to decipher, but appears to contain several lines of characters.



古史傳二十出卷

神代中十一卷

平篤胤謹撰

淺草文庫

男 鐵胤

孫 延胤

續攷

九十九

爾大國主神出嫡后須勢理毘

賣命甚為嫉妒矣故其日子遲

神和備而自出雲將上坐倭國

○古史傳二十

。一

而。東裝立時。片御手繫御馬出。  
シテヨソホヒタ、ストキニカタミテハカケミマノ

鞍片御足踏入其御燈而歌曰。  
クラニカタミアレフミイレソノミアブミニテウタヒタハク

奴婆多麻能久路伎美祁斯遠。  
ヌバタマノクロキミケシラ

麻都夫佐爾登理與曾比淤伎。  
マツブサニトリヨソヒオキ

都登理牟那美流登伎波多多。  
ツトリムナミルトキハタタ

藝母許禮波布佐波受幣都那。  
ギモコレハフサハズヘツナ

美曾邇奴岐宇氏蘇邇杼理能。  
ミソニヌギウテソニドリノ

阿遠伎美祁斯遠麻都夫佐邇。  
アヲキミケシラマツブサニ

登理與曾比淤伎都登理牟那。  
トリヨソヒオキツトリムナ

美流登伎波多多藝母許母布。  
ミルトキハタタギモコモフ

佐波受幣都那美曾邇奴棄宇  
サハズヘツナミソニヌギウ  
 氏夜麻賀多爾麻岐斯阿多泥  
テヤマカタニマギシアタネ  
 都伎曾米紀賀斯流邇斯米許  
ツキシソメキガシルニシメコ  
 呂母遠麻都夫佐邇登理與曾  
ロモヲマツブサニトリヨソ  
 比淤伎都登理牟那美流登伎  
ヒオキツトリムナミルトキ

波多多藝母許斯與呂志伊刀  
ハタタギモスコヨロシイト  
 古夜能伊毛能美許等牟良登  
コヤノイモノミスコトムラト  
 理能和賀牟禮伊那婆比氣登  
リノワガムレイトナバヒケト  
 理能和賀比氣伊那婆那迦士  
リノワガヒケイトナバナカジ  
 登波那波伊布登母夜麻登能  
トハナハイトフトモヤマトノ

比登母登須須伎宇那加夫斯。  
 那賀那加佐麻久阿佐阿米能。  
 佐疑理邇多多牟敘和加久佐。  
 能都麻能美許登許登能加多。  
 理碁登母許遠婆爾其後取大。

御酒坏而立依指舉而歌曰夜。  
 知富許能加微能美許登夜阿。  
 賀淤富久邇奴斯許曾波遠邇。  
 伊麻世婆宇知微流斯麻能佐。  
 伎邪伎加伎微流伊蘇能佐伎。

淤カ知チ受ズ和ワ加カ久ク佐サ能ノ都ツ麻マ母モ多タ

勢セ良ラ米メ阿ア波ハ母モ與ヨ賣メ邇ニ斯シ阿ア禮レ

婆バ那ナ遠ヲ伎キ氏テ遠ヲ波ハ那ナ志シ那ナ遠ヲ伎キ

氏テ都ツ麻マ波ハ那ナ斯シ阿ア夜ヤ加カ伎キ能ノ布フ

波ハ夜ヤ賀ガ斯シ多タ爾ニ牟ム斯シ夫フ須ス麻マ爾ニ

古コ夜ヤ賀ガ斯シ多タ爾ニ多タ久ク夫フ須ス麻マ佐サ

夜ヤ具グ賀ガ斯シ多タ爾ニ阿ア和ワ由ユ伎キ能ノ和ワ

加カ夜ヤ流ル牟ム泥ネ遠ヲ多タ久ク豆ヅ怒ヌ能ノ斯シ

路ロ伎キ多タ陀ダ牟ム伎キ曾ソ陀ダ多タ伎キ多タ多タ

伎キ麻マ那ナ賀ガ理リ麻マ多タ麻マ傳デ多タ麻マ傳デ

佐斯麻伎。毛毛那賀邇。伊遠斯  
 那世。登與美伎。多氏麻都良世。  
 夜知富許能。加微能美許登許。  
 登能迦多理碁登母。許遠婆。如  
 此歌而。即爲宇伎由比而。宇那

賀氣理而。至今鎮坐也。此謂神

語歌也。

嫡后也。師云意富岐佐伎と訓。上小嫡妻とある也。御  
 父神の御言ある故也。此を後よ語傳ふるをて此言ふ  
 故よ。尊みて如此云ゆ。凡て伎佐伎と云。天皇の大御妻  
 小限にて申は御稱ふ。但し倭建命此御妻。橘比賣命  
 此よも如此あるは。出雲風土記。赤衾伊農意保須美  
 比古佐和氣能命之后。天懸津日女命。今云。此事は第七十



はと阿遲須積高日子命之后。天御梶日女命。今云、おろ下  
見え、あど有、せ合せて思、予ば。古神とちをば。天皇お準、予  
尊みて、皇神をも申せる類、よて。其御妻、字も后キサキと申せる  
おゆ、げし。続後紀九、ふも。伊豆、国賀茂、郡阿波、神、是、三島、大  
社、本、后、也。神、名、式、よ、も。安房、国、安房、郡、安房、坐、神  
社、の、次、よ、后、神、大、比、理、刀、咩、命、神、社、あ  
り。是、を、続、後、紀、ふ、も。第、一、后、神、と、あ、り。けりて神名式、お、出雲、  
国、出雲、郡、杵築、大社、の、次、ふ。同社、大神、大后、神社、と、あ、る、は、  
即、此、須、世、理、毘、賣、命、を、祭、れ、る、よ、て。大后、と、申、せ、ゆ、お、を、疑  
お、し。此、の、嫡、后、を、師、お、美、賣、と、訓、ま、さ、る、を、后、せ、を、天、皇、の  
御、嫡、妻、あ、ら、で、を、申、し、難、し、を、固、く、心、得、ら、ま、さ、ゆ、も  
此、よ、て、そ、を、中、へ、けりて、天、皇、の、伎、佐、伎、と、申、け、を、皇、后、ふ、限  
ふ、古、意、お、非、也。けりて、天、皇、の、伎、佐、伎、と、申、け、を、皇、后、ふ、限  
ら、ば、上、代、よ、は、妃、夫、人、あ、ど、此、班、ま、で、を、申、せ、る、稱、あ、り。其

中、ふ、て。最、上、あ、る、一、柱、を。大后、と、申、せ、り。此、後、世、の、皇、后、あ  
り。此、事、を。白、檮、原、宮、段、ふ、委、く、辨、へ、云、は、し。今、云、其、処、此  
傳、見、ハ、ベ、シ。然  
ま、ば、此、の、嫡、后、も、其、よ、準、予、て。意、富、岐、佐、伎、と、訓、は、き、お、と。  
彼、神、名、式、と、照、し、て、愈、明、ら、し。イ、ヨ、マ、キ、ラ○甚、爲、嫉、妒、矣、ハ。伊、多、久、宇  
波、那、理、泥、陀、美、志、給、伎、と、訓、は、し。舒、明、天、皇、紀、よ、一、尼、嫉、宇  
婚、と、あ、る、ふ、依、れ、り。宇  
波、那、理、の、お、お、を。白、檮、原、宮、段、よ、出、今、云、戊、午、歲、八  
月、の、処、見、ベ、シ。高、津、宮、  
段、ふ、も。其、大、后、石、之、日、賣、命、甚、多、嫉、妬、と、あ、り。けりて、此、を、必  
し、め、上、に、沼、河、比、賣、お、み、ふ、を、係、て、見、は、ら、ば、彼、と、は、別  
段、あ、れ、を、總、て、の、上、を、云、お、り。彼、八、上、比、賣、の、此、嫡、后、を、畏  
み、て、稻、羽、よ、帰、ら、ま、し、事、を  
も、思、ふ○日、子、遅、を。夫、妻、け、り、予、此、事、を、云、ふ、時、ふ。其、夫、を  
べ、し。

指て云稱と聞也。八千矛神の一、名と下ふ豊玉毘賣命の御歌也。御答歌を擧とて。其御夫火遠理命此御事をも如此申せ也。儲此稱の意を。上阿斯訶備比古遲神此處今云段此傳見べし。ふ云る如ふまは。夫を云も。今世此賤者の言ふ。夫を意夜遅と云せ同意あるはし。○和備而之。万葉四よ。物思跡和備居時二。まと丈夫之思和備乍。まと遠有者和備而毛有乎あぞ。猶いと多う也。爲方あくはし。迫りと依意あ也。光仁天皇紀よ。藤原永手大臣を悼賜了る詔ふ。言年須倍母無爲牟須倍母不知爾悔備賜比和備賜比。と何依よても知べし。倭姫命世記よ。宮外覓侘賜比。天其処乎和比野止号支。○自出雲せは。

上の高志因沼河比賣の事とて連て見也。疑ひ有べし。まぞ。此を別段あまむ彼ふを拘えらび。○將上坐倭因。而因はしも多れりよ。遠き倭よし。行坐むとあく。た。倭ハ當昔とて既に他因ふ殊ある。深き由縁あ也。けむりし。和御魂を其因の大御和山。鎮坐せ。上とは。鄙よめ京子行を云ふ。賜ふなも思ひ合はべし。れ也。此を皇都ふ爲て。此後の言を以。語傳了るれ也。○束装之時。下よ將降裝束之間。朝倉宮段。装束之狀雄畧。天皇紀よ。装束已畢進軍門云々。万葉二よ。皇子之御門乎。神宮爾裝束奉而あど見也。あまらふ準了て。此の束装下上よ誤れるよ。やと思はるまど。神功皇后紀。一云。訓を下也。歌ふ。伎美賀余曾比。万葉十の文よも如此あり。

四ふ。水都等利乃多く武與曾比爾。二十ふ。等里與曾比門。出乎須禮婆。おぞ猶有ふ依れ。立を發出賜ふれ。○片御手云くは。馬よ乘むと乞賜ふ状あり。○御馬を美麻と訓べし。万葉五ふ。美麻知可豆加婆とあり。御馬近。○鞍ハ。和名抄よ。和名久良とあり。雄略天皇卷の歌よ。甲斐能久呂古麻久良伎世婆とあり。○御鐙和名抄よ。蔣魴切韻云。鐙兩邊承脚具也。和名阿布美とあり。名義は足踏あり。万葉十七ふ。可波能和多。○奴婆多麻能。前ふ見也。○久路理瀨安夫美都加須毛。○久路伎美祁斯遠。黒御衣をあり。推古天皇紀ふ。衣裳万葉十ふ。公之御衣。十四ふ。伎美我美家志。とあり。此を太刀

は佩物ある故よ。御佩と云ひ。弓は執物ある故よ。御執と云如く。衣を著物ある故よ。御著と云れ。著を古言よ。祁流と云。まよ倭建命の御歌よ。祁世流と見也。れを彼處ふ云。今云。景行天皇。さて黒衣服を。喪服。昔は常よは服。ざ依。とれ依を。此。如此あるは如何。云よ。は於喪葬令。凡。天皇云く。服。錫紵。義解。錫紵者。細布。即用。淺墨染也。と見え。常。小歌よ。も墨染。衣と。とみ。まよ。中昔の書等。是を鈍色と云ふ。此は。今云。鼠色。も。眞黒ある。非。其鼠色の中よ。淺。淺き。け。ち。免。有。あり。さて。吉部。秘。訓。抄。よ。鼠。色。鈍。色。と。あら。べ。云。て。分。て。る。よ。と。も。有。れ。ど。今。云。鼠。色。を。く。さ。く。何。ま。古。鈍。色。と。云。し。物。必。其。中。ふ。あり。鈍。色。は。移。花。よ。て。染。と。云。は。墨。染。ハ。何。万。見。ぐ。る。

しき色ある故、少く不ひ有せむとて、後より青みを加へ、  
依物なり。故に青鈍、あど云名もあり、まゝ青花、不墨字入て  
染と云へるも同じ。あまらは皆後の事にて、本を多く、墨  
深あり。服假間事と云ふ物も、著服者、可用、黄、其色或、墨  
許、染、之、或、墨、入、は、と、持、統、天、皇、紀、七、年、正、月、詔、ふ、令、天、下、百  
姓、服、黄、色、衣、奴、阜、色、と、見、え、衣、服、令、ふ、家、人、奴、婢、椽、墨、衣、と  
定、ら、れ、と、依、も、右、に、鼠、色、あ、る、は、し、此、等、ハ、之、れ、や、後、の、御、制、お、ま、ど、も、上、代、を  
巴、も、右、の、色、を、賤、し、め、惡、と、る、べ、し、、け、て、真、墨、ハ、依、は、貴、人、も、常、不、著、と、る、  
せ、め、云、は、れ、れ、ど、上、代、を、り、中、昔、は、で、め、黒、衣、を、著、ぬ、依、あ  
と、物、不、見、え、祓、也、中、昔、の、書、ど、も、衣、服、此、事、を、云、外、は、黒、  
他、の、色、に、黒、み、て、見、ぬ、る、あ、と、不、て、寒、不、黒、色、あ、る、不、は、非  
矣、源、氏、若、菜、下、卷、よ、不、布、ひ、ぬ、ぬ、く、黒、き、う、牙、の、衣、と、何  
る、類、あ、り、當、時、黒、袍、を、無、れ、ぬ、此、も、紫、彼、鈍、色、不、を、何、ら、で  
色、の、い、と、く、黒、み、と、る、を、う、く、云、也、

眞黒あるをも人、此、賤し、終て、好ざりしと見せと也。四、位、  
上、紫、袍、を、改、終、て、黒、色、よ、あ、れ、る、ハ、い、や、後、の、あ、と、あ、り、斯  
て、今、世、人、の、黒、色、を、し、も、好、む、を、黒、袍、を、尚、ば、る、と、り、移、  
れる、人、さ、れ、ぬ、今、此、は、黒、御、衣、と、あ、る、は、此、を、不、宜、と、て、棄、  
依、こ、せ、残、云、む、米、不、先、故、不、好、は、し、か、ら、ぬ、色、を、と、み、給  
牙、る、あ、り、儲、次、は、青、衣、を、云、ひ、て、其、を、も、棄、ス、テ、、の、次、は、緋、色  
を、云、ひ、て、此、を、宜、き、と、と、み、給、牙、依、次、第、お、れ、お、ら、後、の  
御、く、世、々、の、服、色、に、御、制、此、次、第、と、も、合、る、を、や、御、衣、服、色、此、  
第、を、大、抵、か、ら、因、の、隋、唐、の、制、よ、あ、ら、へ、依、物、あ、れ、ど、も、上、  
代、を、り、も、お、れ、お、ら、人、に、尚、み、好、む、色、と、卑、し、め、惡、む、色、  
と、の、次、第、を、然、あ、り、て、此、方、も、彼、處、も、似、と、り、な、む、ま、と、彼、  
因、此、古、不、代、ご、と、よ、各、尚、む、色、に、有、し、を、強、て、定、め、し、ち、  
あ、ら、お、と、あ、ま、む、そ、ハ、○、麻、都、夫、佐、爾、ハ、眞、具、あ、り、都、夫、佐  
中、く、り、云、ふ、足、ら、ぬ、

とは。落るおとれく。調へ備ふるを云ふ。○登理與曾比を。  
取装お。○淤伎都登理を。奥鳥お。海川ふまき。池おと  
ふまれ。水上お浮居る鳥を云て。水鳥おとあ。○奥鳥鴨ともあ。奥鳥味經乃  
原ともお。け。○牟那美流登伎ハ。胸見  
時お。水鳥ハ。頸を延居て己が胸を見る如く。はる物あ  
る。お譬へて云お。○波多々藝母を。鰭揚もあ。波多を  
中昔の物語書れど。袖之波多。ま。波多袖おと有。袖  
此端お方を云。魚此鰭。○波多と云名を。左右の比  
礼を本よて。はと俗言。物此邊側を。波多と云も同意あ  
云あるべし。

○多藝ハ万葉二。多氣婆奴禮多香根者長寸妹之髮。九  
お。髪多久麻庭爾。十四。古麻波多具等毛。十九。馬太伎  
由吉氏。○許禮波布佐波受ハ。此者不宜お。此言は。  
上の不良此訓を論へる處よ云。う。如く。○今云第六段此  
宜しからばと棄ふ意お。俗お氣よ入。おといふ意お。り。  
て。ま。く。お。揚。る。を。云。ふ。馬。太。具。と。を。手。綱。を。と。ぐ。り。ち。ま。を。  
此を。左右此手残張。袖多。く。お。揚。て。加。此。水。鳥。の。胸。見。  
る。如。く。お。あ。て。吾。著。装。と。る。衣。を。好。し。や。悪。し。や。と。見。る。を。  
云。お。今。世。人。も。新。衣。お。ど。初。免。て。著。と。依。時。を。必。然。爲。て。  
見。る。も。此。ぞ。○許禮波布佐波受ハ。此者不宜お。此言は。  
見。る。も。此。ぞ。○許禮波布佐波受ハ。此者不宜お。此言は。  
見。る。も。此。ぞ。○許禮波布佐波受ハ。此者不宜お。此言は。

方と源氏物語  
よ見えとり。○幣都那美曾邇奴岐宇氏は於邊浪磯脱  
棄あす。と師説あす。を直浪磯とて言おる。おそ云べき  
とまぎぞ万葉よ白浪乃濱松之枝あざと免るも同格りて  
那美え那岐の反ふて。もとは浪此立さじぐを云名ある  
こと。上類那藝類那美神の処よ云へ依如くあまバ那美  
曾よて。即波此立さじぐ磯と云ふ意あり。土佐日記の哥  
ふ。風ふとる浪のいそよを鶯も春めえち。けて棄を宇氏  
ら。燕花のみぞさく。是も浪乃いそと詠り。けて棄を宇氏  
と云は。御誓段ふ。吹棄とる。戎も。神代紀ふ。此云浮枳于  
都屢ぞ見えとり。落窪物語ふ。逐棄むと云こを。於比  
宇氏牟とあす。後世定家卿の哥よも。禊衣る麻の立葉を  
和物語よ。布氏都せも云へ。此そふぬぎりてを。○蘇  
契沖が鳩織打而ありと云。予るを。いとく誤まゆ。○蘇  
邇邇理能ハ。鳩鳥之ふて。青枕言あす。其は和名抄ふ。爾

雅集註云。鳩小鳥也。色青翠而食魚。江東呼爲水狗。和名曾  
比。文徳天皇紀用。魚虎鳥。やあす。其色殊よ青翠乃れを  
あす。鳩字を寫誤れ。依あらむ。けり。天若日子段ふ。翠鳥と  
何依も。書紀ふ。鳩とあま。此鳥あす。あは。今世よ川世  
美と云物よ。塔囊抄ふ。少微と云。予り。曾比。少微世美あ  
ぞ。み。蘇爾の訛れるあす。綠色を云も。翠鳥色此曾を  
省々依あるべし。○許母布佐波受。此亦不宜あす。○夜  
麻賀多爾。山縣よあす。但此地。名よは非。交。あま。山の  
縣あす。地名よあるも。本。○麻岐斯は。求しあす。ま。時し  
む。と。師の云。おる。三言此句あす。○阿多尼都伎ハ。茜  
求し。此方を用ふべし。

春ツキくと契冲云子コトめ。信コト然聞ゆ依ヨを。赤根を阿多尼と云  
むあやイサカを。聊心イサカゆうハ。若ハ草書とハ誤カまるカるカ。かや書カるカ  
れるカふカや。和名抄染色具カ。兼名苑注云。茜ハ可以キ染ム緋ヒ者也。  
有らむ。和名阿加禰と見え。縫殿寮式雜染用度中カ。深緋綾一足。  
茜大四十斤。紫草卅斤云くと見ゆ。かきまカむ。此も緋色を  
染るカ依カべし。○曾米紀賀斯流邇ハ。染木之汁ガも亦カ。染  
木と云。即上チ此カ茜カよカて。其を搗ツキとる汁カと云あり。儲茜サテハ  
草依カ字。木と云るカ。物染るカよカ。今世カも木草ともカ。凡  
ては染草カを云如く。古カは草をも凡カて染木カを云カ。契冲  
を木カと云むカ。こカぞカいカかカぶカあカまカむカ。若カも阿多尼カ。皮字剥カて  
染物カを染カるカ木カ。名カよカて。其カを染カ木カと云カるカふカやカとも云カ子カめ。○

今云内山真竜カ。出雲風土記解カ。此カの曾米紀カ。鳥草カ樹  
ありと云カるカ。詳カあらぬ説カあらぬ。由カ有カげあり。第七十三  
段佐世カ。木カの処カ。又ハ木と云カは。本カを植物カ此カ總カ名カよカて。草カよ  
此カ傳カ見カるカべし。波カ岐カ乎カ岐カ須カ。岐カ余カ母カ岐カ布カ。岐カあカどカ草カあ  
めカあカむカ。波カ岐カ乎カ岐カ須カ。岐カ余カ母カ岐カ布カ。岐カあカどカ草カあ  
もカ。伎カと云カ名カの多カるカるカ。木カと云カあカむカ。や  
○斯米許呂母遠カ。染衣カをカ。斯米カと曾米カをカ。同言  
ぞ。○許斯與呂志カは。此カ宜カよカて。斯カを助辭カあり。与呂志カてふ  
葉考カ。けカて首カとカ。此カまでカ。此カ意カを括カて云カはカ。今倭カ。固カ小  
見カゆ。物カ依カ装カふカ。色カくカ。此カ衣カを取カ著カて。あカくカ。政カむカるカ。茜カふカ。染カと  
依カ緋カ衣カ。此カぞカ。心カよカかカあカひカ多カ宜カきカ。と詠カ給カふカあり。上カ小カ束カ装カ  
此カ緋カ衣カを著カ給カ。儲カかカくカ。装束カも宜カしカ。れカむカ。今カはカ。出カ發カ  
るカ。依カべし。儲カかカくカ。装束カも宜カしカ。れカむカ。今カはカ。出カ發カ  
あカむカ。とカ。云カ意カ。言カ外カ。小カこカめカまカ。○伊カ刀カ古カ夜カ能カ。妹カを

云む枕言と聞えと也。伊刀古とは。人を深く親睦む稱ふ  
て。伊刀富志伎子てふこ也。用此記此例あり。万葉  
十六ふ。伊刀古。名兄乃君居く而。物爾伊行跡波云く。八重  
疊平郡乃山爾。此古字を今本よ。布流伎と訓とれどいせ  
此をふるきと云。せほ依む。八重疊まで。平郡を云む序  
あるが。居く而云くを思ふ。年久えく同居せ依者  
此状あまむ。名兄とを。妻此夫を云ふはまよ詠る語あり。  
然まバ夫を親睦しみて。伊刀古と云す。はと神樂歌篠  
波ふ。見之禰川久乎見名乃與佐く也。曾禮毛加毛。加禮毛  
加毛。伊止己世仁。万伊止古世仁世牟也。御稻舂女之美乎  
其哉彼哉あり伊

止己世の世を心得。せほ依む。妻ふせむと云意と聞え。風  
俗よく歌ふ。伊止古世乃。加止仁。天宇止乎比佐介天を何  
るも親睦しくびる人の門ふ。調度を提てと云ふ也。此等と彼  
万葉あ依を合せて思ふ。夫婦ハ殊ふ親睦  
志む物あまむ。互ふぞ伊刀古と云む。まと從父母兄弟  
め。本を互ふ親睦みて云し。定ま依稱ふれま依あるは  
し。師説よ。寢所屋之ありと。あめい。はと或人を寢  
まど。床屋之寐と。あむ。云す。床をさても有ぬべ  
たむ非あり。ちむ夜能ハ。能夜を下上ふ寫誤ま依り。能  
夜てふ例也。繼體天皇卷歌ふ。阿布美能夜。那那能和久基。  
淡海之毛野。せほ依むを始よ。万葉十四よ。美奈刀能也。葦  
若子あり。



グ中ぬる。古今集ふ。淡海<sup>アフリミ</sup>此や。鏡の山をあぞ。あお有<sup>ア</sup>。夜  
を助辭<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>。○伊毛能美許等ハ。妹命<sup>イモノミコト</sup>ふて。此時須世理毘  
賣<sup>イナバ</sup>命<sup>ミコト</sup>よ對<sup>カ</sup>ひて詔<sup>ミコトノコト</sup>ふ<sup>カ</sup>。○牟良登理能<sup>ムラトリノ</sup>ハ。群鳥<sup>ムラトリノ</sup>之<sup>ノ</sup>よて。群  
往<sup>イナバ</sup>者<sup>ノ</sup>と云<sup>ハ</sup>む枕言<sup>マクコト</sup>あり。○和賀牟禮伊那婆<sup>ワガムレイナバ</sup>ハ。數多<sup>トモ</sup>此<sup>ノ</sup>從<sup>トモ</sup>者<sup>ノ</sup>  
ぞも加<sup>ツ</sup>交<sup>マ</sup>連<sup>ネ</sup>て。吾<sup>ワガ</sup>群<sup>ムラトリ</sup>往<sup>イナバ</sup>者<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>。万葉九<sup>マンヤク</sup>ふ。天離<sup>アマリ</sup>る夷<sup>ヒナ</sup>治<sup>ツ</sup>ふ<sup>カ</sup>  
朝<sup>アサ</sup>鳥<sup>トリ</sup>此<sup>ノ</sup>朝<sup>アサ</sup>立<sup>タ</sup>志<sup>シ</sup>あ<sup>ア</sup>。群鳥<sup>ムラトリ</sup>此<sup>ノ</sup>群<sup>ムラトリ</sup>立<sup>タ</sup>行<sup>ユク</sup>む云<sup>ハ</sup>。十七<sup>トウジチ</sup>ふ無<sup>ム</sup>良<sup>ラ</sup>等<sup>ト</sup>  
理能安佐太知伊奈婆<sup>リネアサタチイナバ</sup>云<sup>ハ</sup>。二十<sup>トウジチ</sup>ふ。群鳥<sup>ムラトリ</sup>の伊<sup>イ</sup>壑<sup>ダ</sup>多<sup>タ</sup>知<sup>チ</sup>加<sup>カ</sup>氏<sup>シ</sup>  
爾<sup>ニ</sup>あ<sup>ア</sup>ども訓<sup>ツ</sup>。○比氣登理能<sup>ヒケトリン</sup>を。所<sup>ヒケ</sup>引<sup>ケ</sup>鳥<sup>トリ</sup>之<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>。比氣<sup>ヒケ</sup>を比  
加禮<sup>ヒケ</sup>を切<sup>ツ</sup>と<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>。比<sup>ヒ</sup>伎<sup>キ</sup>と云<sup>ハ</sup>と。多<sup>タ</sup>くむ<sup>ム</sup>居<sup>イ</sup>る鳥<sup>トリ</sup>此<sup>ノ</sup>中<sup>ナカ</sup>ふ。  
一<sup>イツ</sup>グ飛<sup>トビ</sup>立<sup>タ</sup>バ。其<sup>ソレ</sup>引<sup>ヒ</sup>れて。餘<sup>ヨリ</sup>の鳥<sup>トリ</sup>も共<sup>トモ</sup>立<sup>ツ</sup>を云<sup>ハ</sup>。此<sup>レ</sup>も枕

言<sup>コト</sup>あ<sup>ア</sup>。契<sup>ケ</sup>沖<sup>ノ</sup>の引<sup>ヒ</sup>島<sup>シマ</sup>よて引<sup>ヒ</sup>む引<sup>ヒ</sup>て。○和賀比氣伊那婆<sup>ワガヒケイナバ</sup>ハ。  
吾<sup>ワガ</sup>被<sup>ヒ</sup>引<sup>ヒ</sup>往<sup>イナバ</sup>者<sup>ノ</sup>あり。加<sup>カ</sup>此<sup>ノ</sup>數<sup>トモ</sup>多<sup>トモ</sup>此<sup>ノ</sup>從<sup>トモ</sup>者<sup>ノ</sup>共<sup>トモ</sup>の裝<sup>ヨソビタテ</sup>立<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>引<sup>ヒ</sup>れ往<sup>ユク</sup>  
を云<sup>ハ</sup>。源<sup>タケナカ</sup>氏<sup>ノ</sup>松<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>卷<sup>マ</sup>よ<sup>リ</sup>。此<sup>ノ</sup>引<sup>ヒ</sup>しきよ引<sup>ヒ</sup>れて出<sup>デ</sup>給<sup>タマ</sup>ふとある  
と<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>似<sup>ニ</sup>たり。或<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>説<sup>ハ</sup>ふ。鳥<sup>トリ</sup>を取<sup>リ</sup>ふ。食<sup>ク</sup>鳥<sup>トリ</sup>を出<sup>デ</sup>しお<sup>ハ</sup>。バそ  
ま<sup>マ</sup>引<sup>ヒ</sup>きて友<sup>トモ</sup>鳥<sup>トリ</sup>の集<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup>。比<sup>ヒ</sup>氣<sup>キ</sup>鳥<sup>トリ</sup>あり。男<sup>ヲ</sup>ハ女<sup>メ</sup>は男<sup>ヲ</sup>引<sup>ヒ</sup>  
引<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>。此<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>六<sup>ム</sup>ふ。寧<sup>ナ</sup>樂<sup>ラク</sup>京<sup>キョウ</sup>を山<sup>ヤマ</sup>背<sup>セ</sup>久<sup>ク</sup>爾<sup>ニ</sup>都<sup>ト</sup>よ遷<sup>ウツリ</sup>さ  
れ<sup>ル</sup>。時<sup>トキ</sup>の歌<sup>ウタ</sup>ふ。皇<sup>ミカド</sup>此<sup>ノ</sup>引<sup>ヒ</sup>の<sup>ハ</sup>よ<sup>リ</sup>。春花<sup>ハルノハナ</sup>此<sup>ノ</sup>う<sup>チ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>ひ易<sup>カ</sup>く。  
村<sup>ムラ</sup>鳥<sup>トリ</sup>此<sup>ノ</sup>且<sup>カサ</sup>立<sup>タチ</sup>往<sup>ユク</sup>む云<sup>ハ</sup>。引<sup>ヒ</sup>ま<sup>マ</sup>ふ<sup>ク</sup>と<sup>ハ</sup>。此<sup>ノ</sup>京<sup>キョウ</sup>を引<sup>ヒ</sup>迂<sup>ウ</sup>  
ほ<sup>ホ</sup>ふ<sup>ク</sup>。と云<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>あり。次<sup>ツギ</sup>十九<sup>ユウジウ</sup>ふ。麻<sup>マ</sup>須<sup>ス</sup>良<sup>ラ</sup>乎<sup>カ</sup>能<sup>ケ</sup>。比<sup>ヒ</sup>伎<sup>キ</sup>能<sup>ケ</sup>麻<sup>マ</sup>  
爾<sup>ニ</sup>麻<sup>マ</sup>爾<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>奈<sup>ナ</sup>謝<sup>シヤ</sup>可<sup>カ</sup>流<sup>リウ</sup>古<sup>コ</sup>之<sup>ノ</sup>地<sup>チ</sup>乎<sup>カ</sup>左<sup>サ</sup>之<sup>ノ</sup>氏<sup>シ</sup>云<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>引<sup>ヒ</sup>率<sup>ソウ</sup>て  
往<sup>ユク</sup>ま<sup>マ</sup>ふ<sup>ク</sup>引<sup>ヒ</sup>む往<sup>ユク</sup>を云<sup>ハ</sup>。○那<sup>ナ</sup>迦<sup>カ</sup>士<sup>シ</sup>登<sup>ト</sup>波<sup>ハ</sup>。那<sup>ナ</sup>波<sup>ハ</sup>伊<sup>イ</sup>布<sup>フ</sup>登<sup>ト</sup>母<sup>モ</sup>

は。不泣者汝者雖言あす。○夜麻登能た山處之あるは。ま。山本之よても有む。倭國之と云よハ非じ其故を。此處よ留り給ふ人のうすを差て行あとの倭此物よ。多とへ云むこといかに薄をいぢこふゆ。多。倭物あるを。出雲よして遠ま倭の字云むおとも由れく。ま。某野と云。某山のやう云む似あはし加めあむ。淫く倭の薄やを殊ある名産あど。乳らバおそ有免さら。ではいので。○比登母登須く伎た。一本薄あす。今。世よ此。一種あまど。其よた非。和名抄よ。爾雅云草聚生曰薄新。撰万葉集云。花薄波奈須く木。辨色立成云。芋和名上同。あす。神功皇后紀。仁德天皇紀あどふた。荻を須く伎と訓。す。夫木集薄の歌中よ。兼輔卿。むらさたの一本は。き云。云。家集よた。二此句。高津宮段の大御歌よ。夜多能比登母。一本菊ふとあゆ。

登須宜波拾遺集物名よ一本菊もあす。○宇那加夫斯ハ。項傾あす。和名抄よ。陸詞云。項頸後也。和名字奈之神代紀。ふ。頗傾此云。歌示志とあす。俗よ。物の下をゆ上の勝て。此。は項を垂傾くるよて。泣さる哉云。は。一本立る。傾。く。意よ連とゆ。天智紀よ。稻。の。ことよ垂穎而熟とあり。○那賀那加佐麻久ハ。汝之將。泣あす。那加麻久や云べき字。か。云。た。那久。上。め。此。も。汝。は。須。世。理。毘。賣。を。指。す。麻。久。を。牟。と。云。と。同。意。ふ。て。麻。志。と。一。辭。あ。る。哉。下。ふ。語。を。續。む。と。て。麻。久。を。活。し。云。れ。す。可。あ。下。よ。あ。く。と。犯。た。辨。久。や。云。せ。同。格。あ。○。阿。佐。阿。米。能。ハ。朝。雨。之。れ。す。○。佐。疑。理。邇。多。く。牟。敘。ハ。佐。霧。を。將。起。ぞ。よ。て。

四言二句あり。今云ふ此二句はあきてはて右三句は  
意を。汝が泣む其涙を。朝雨の如く。まよ朝雨を。只霧を云  
し。歎息ハ。狭霧ふ起む物ぞと云ふあり。あぢきハ。長息を  
長くおく。息ハ霧よ立せ云は。万葉五ふ。大野山紀利多知  
和多流。和何那宜久於伎蘇乃可是爾。紀利多知和多流。十  
五よも。君之由久海邊乃夜杼爾奇利多。婆安我多知奈  
氣久伊伎等之理麻勢とあり。まよ同卷よ。秋佐良婆安比  
里尔多都倍久。奈気伎之麻佐年ともあり。源氏明石卷よ。  
歎きおく。あうしの浦り朝霧の立やや人を思ひやる哉。  
まよ涙を雨よ云るハ。万葉三ふ。吾泣涙有間山雲居輕引。  
雨爾零寸八あどあり。偕那迦士登波云くとあり。此まで此

意を括て云ば。今吾離別て倭子往む。汝今あそを。心強く  
泣じと云とも。必吾を戀偲びて。痛く泣おく。歎か乎ぞと  
云るあり。○和加久佐能ハ。若草之あり。あを妻と云む枕  
言ひゆ。冠辭考云。万葉九よ。河内、大橋よて。若草乃夫香有  
良武十ふ。稚草乃妻手枕跡云く。仁賢天皇紀よ。弱草吾夫  
何怜矣。古者以弱草為夫。とも見也。あは春此若草ハ。愛し  
く美まほ。物あまむ。夫婦よ譬牙とあり。草之益目類四寸。春  
吾於富吉美可聞これ右ふ云が如し。十一ふ。若草乃新し  
枕乎卷始而云く。若草ハ新しき草あまむ。女と新枕まく  
よ云うけお。お十三ふ。若草乃思就西君自二云く。十四  
ふ。於毛思路伎野乎婆奈夜吉曾布流久左尔。仁比久佐麻  
自利於非波於布流。○都麻能美許登ハ。妻之命ふて。是も  
柯尔あどとあり。

須世理毘賣命を指す。○其後とは。上此嫡后を指す。○大御酒坏を。大御佐加豆伎を訓べし。万葉ふも佐加豆伎とあす。名義ハ此ヲ書る如く。酒を盛る坏也。坏也。かく依器の總名ぞ。和名抄瓦器類ふ。兼名苑云。盃一名卮。盃亦作杯。和名佐賀都木。方言注云。盃盃之最小者也。和名同上也。杯也。杯也。坏とハ別あり。○指擧ハ。佐宜と訓法し。即佐志阿宜を約と依言ふ。此の字此意あり。朝倉宮段よも三重。殊指○夜知富許能ハ。八千矛之仇也。○加微能美許登夜夜也。助辭ふ。與と云むが如し。○阿賀於富久邇。奴斯許曾波阿賀ハ親みて吾と云ふ。けて此の大因主も御名ふ

は非也。上の為大因主神とある 許曾波を辭ふ。○遠邇伊麻世婆ハ。男ふ坐者仇也。○宇知微流ハ打見ふ。打を方

此事ふ添云言あり。○斯麻能佐伎邪伎也。嶋之崎くあり。万葉六ふ。島乃崎く隈毛不置十三。○加伎微流ハ。搔見ふ

て。搔も上の打と同く。添云ふ言あり。但し打を常よひろ。手して為事よ此み云が如く。あまも打も本ハ手して為事あまむ。同じことある。搔も搔絶あどむ。手の手事あらねど。添けて打見搔見もふ。見渡は處を云ふ。

○伊蘇能佐伎於知受ハ。八言よて所謂。磯之崎不落あり。万葉三ふ。磯前榜手同行者。今本ふイソガキヲ。六ふ付將賜嶋之崎前依將賜磯乃崎前十九ふ。佐之與良牟。磯乃崎

崎あど何也。式よ。因幡国八上郡。伊蘇。乃佐只神社と云も見也。 淤知受ハ漏さば

ぬ也。祈年祭祝詞よ。嶋之八十嶋オタルコトナク事無万葉一ヌルヨオチ。寐夜不

落。まよ川隈之八十阿不落クオチズ四。蓋世流ケセルコモノ衣之針目不落メオチズあ

ぞ。猶多加也。毎さて契冲グ云上の島崎ハ崎くと云よ。崎

落。びと云。牙り。まよ此不落よて島之。崎とのみ云ふ故り。 ○都麻母多勢良米

を妻將持有ツメモセアラあ也。年と云。浅きを米と云。牙は也。上此許曾

小應ふるあゆ。ちて母多須良米を云ばして母多勢良米

を良よ活イダシうしと依よて。あまらち持せり持せるあど云。下此理流

書く言コトおのひの格あり。故よ此時ハ良を持ハ有と有字よ

當れ也。まよ母多須良米此と死シち。多タ持チめを云。同

法ハまよ良を下よ属て。良米を云。辞あり。此差ををく考ふ

し。法ハ○阿波母與阿波ハ吾者アハふて。母與を助辭タあ也。清寧天

皇紀大御歌よ。奴底ヌヂ喻羅ユラ俱慕與キモヨ。まよ於岐每慕與オキノミモヨ。

此コノ万葉一。小籠毛與コカゴモヨあど何也。はよ此字毛夜とも云り。万

葉同。○賣ウ邇斯阿禮婆ニシアラハハ。女メふしシ在者アあ也。斯シハ助辭タあ也。

万葉三よ手弱タヨワキ寸女メニレアラ有者アあども何ゆ。今本の訓 ○那遠伎

氏ハ契冲云除オキナラテ汝而ニあ也。於伎オキ有レ浅シきを於オを畧ダけゆ。今

俗を哀久アハクとかけむ。汝除ニてと。辭無シ小詔コミコト牙ハるル。を思シ法ハ乃

まよ然シカよ非ヒび置キは於久オキの假字カあゆと云ゆ。置の於を省

玉タマ置キあど常トコ多タりル中ナカよ此コノ殊ト神樂歌カミガク植ウ春ハルふ。和禮ワレ乎カ支キ

天アメ不多フタ川カハ万マン止留トドマ也。除我而取二風俗カミヤウ歌ウタよ。木見キミ乎カ支キ天アメ云

云イハ那ナど有アルも同格ドウカクあ也。此風俗あるを一本ふち ○遠波トシハ那

志ハ。夫者無<sup>ハ</sup>あ<sup>ナレ</sup>也。○都麻波那斯も。夫者無<sup>ハ</sup>れ<sup>ナレ</sup>。古者夫婦  
あぐひよ都麻と云しあやを。云ぬ更<sup>サ</sup>あ<sup>ラ</sup>也。仁賢天皇紀<sup>此</sup>。  
云阿我因摩播耶万葉九よ若草之夫香有良武こまら即  
夫字を書り都麻を云稱ハ今の俗言よ都礼阿比と云ふ  
る。ちて初と云此まで此意を總ていはぐ。汝命こそは  
まり。ちて初と云此まで此意を總ていはぐ。汝命こそは  
男ふ多坐<sup>ラ</sup>るせむ。嶋の崎く磯<sup>ハ</sup>崎<sup>ク</sup>。以<sup>ハ</sup>お<sup>ヨ</sup>も<sup>ク</sup>。遺<sup>コ</sup>  
依處<sup>ア</sup>あ<sup>ク</sup>。妻<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>て御坐<sup>ラ</sup>ら<sup>ズ</sup>。吾ハ女<sup>ヲ</sup>あ<sup>マ</sup>ま<sup>バ</sup>。汝命<sup>ヲ</sup>を<sup>オ</sup>除<sup>ク</sup>て。  
他<sup>カ</sup>も夫<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>と云<sup>フ</sup>。万葉十四<sup>ヨ</sup>う<sup>ノ</sup>れ<sup>ハ</sup>む<sup>ラ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>は<sup>ラ</sup>  
己ま和ま<sup>ル</sup>れや。や云<sup>ハ</sup>。一<sup>カ</sup>如<sup>キ</sup>れ<sup>ド</sup>。今汝命<sup>ハ</sup>見<sup>テ</sup>棄<sup>テ</sup>他<sup>ヲ</sup>  
首<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>あ<sup>ク</sup>。ろ<sup>ク</sup>此<sup>ハ</sup>よ<sup>シ</sup>と<sup>云</sup>也。如此<sup>キ</sup>れ<sup>ド</sup>。今汝命<sup>ハ</sup>見<sup>テ</sup>棄<sup>テ</sup>他<sup>ヲ</sup>  
固<sup>ク</sup>ふ<sup>レ</sup>往<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>あ<sup>バ</sup>。吾ハ頼<sup>ム</sup>む<sup>カ</sup>と無<sup>キ</sup>バ。如何<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>む<sup>ト</sup>。別<sup>レ</sup>を<sup>悲</sup>  
哀<sup>シ</sup>て。今と云<sup>ハ</sup>。げ<sup>ハ</sup>あ<sup>ク</sup>嫉<sup>ム</sup>妒<sup>ル</sup>は<sup>ル</sup>あ<sup>ヤ</sup>も爲<sup>シ</sup>。倭<sup>ノ</sup>往<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>

あやを思<sup>フ</sup>し止<sup>ム</sup>賜<sup>フ</sup>子<sup>ト</sup>。と云意<sup>ヲ</sup>を。此間<sup>ハ</sup>ふ含<sup>メ</sup>免<sup>レ</sup>と<sup>云</sup>也。此處<sup>ハ</sup>よ  
留<sup>リ</sup>住<sup>ミ</sup>賜<sup>ハ</sup>は<sup>ク</sup>。今<sup>ト</sup>り<sup>テ</sup>夫<sup>ヲ</sup>婦<sup>ヲ</sup>む<sup>カ</sup>ま<sup>リ</sup>よ。語<sup>ヲ</sup>相<sup>ヲ</sup>を  
爲<sup>シ</sup>てむ<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>意<sup>ヲ</sup>を。此<sup>ハ</sup>よ<sup>シ</sup>下<sup>ニ</sup>述<sup>ス</sup>と<sup>云</sup>也。○阿夜加  
伎能<sup>ハ</sup>ハ文<sup>ヲ</sup>垣<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>ふ<sup>テ</sup>。文<sup>ハ</sup>は物<sup>ノ</sup>の形<sup>ヲ</sup>畫<sup>キ</sup>。彩<sup>色</sup>あ<sup>ど</sup>せ<sup>ル</sup>を  
云<sup>ハ</sup>ぬ<sup>レ</sup>げ<sup>シ</sup>。又<sup>ハ</sup>綾<sup>ヲ</sup>も有<sup>ベ</sup>し。綾<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>疑<sup>ム</sup>もあ<sup>ラ</sup>べ  
あまど。此<sup>ハ</sup>よ<sup>シ</sup>垣<sup>ハ</sup>帷<sup>ノ</sup>帳<sup>ヲ</sup>あ<sup>ぞ</sup>残<sup>リ</sup>云<sup>ハ</sup>あ<sup>ラ</sup>べ<sup>シ</sup>。大神宮儀式<sup>ハ</sup>  
衣<sup>ヲ</sup>垣<sup>ハ</sup>曳<sup>キ</sup>氏<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>モ</sup>。絶<sup>ヲ</sup>を垣<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>引<sup>キ</sup>延<sup>ハ</sup>隔<sup>ル</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>を</sup>云<sup>ハ</sup>る<sup>よ</sup>。  
準<sup>テ</sup>知<sup>ラ</sup>し。凡<sup>テ</sup>加<sup>ハ</sup>伎<sup>ハ</sup>。内<sup>外</sup>を隔<sup>限</sup>依<sup>由</sup>の<sup>名</sup>あ<sup>ま</sup>む<sup>也</sup>。  
何<sup>ノ</sup>ふ<sup>多</sup>め<sup>云</sup>べ<sup>死</sup>あ<sup>也</sup>也。契<sup>ハ</sup>沖<sup>ハ</sup>文<sup>ハ</sup>垣<sup>ハ</sup>よ<sup>テ</sup>垣<sup>ヲ</sup>を<sup>さ</sup>る<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>る<sup>よ</sup>  
也と云<sup>ハ</sup>れ<sup>た</sup>ま<sup>ど</sup>垣<sup>ハ</sup>ふ<sup>テ</sup>て<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>あ<sup>ひ</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>其</sup>故<sup>ハ</sup>垣<sup>ハ</sup>  
此<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>と云<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>戸<sup>外</sup>の<sup>庭</sup>に<sup>寝</sup>依<sup>ハ</sup>ぬ<sup>レ</sup>あ<sup>り</sup>。か<sup>ハ</sup>妻<sup>ト</sup>  
み<sup>ハ</sup>八<sup>重</sup>垣<sup>作</sup>る<sup>あ</sup>ど<sup>ク</sup>。其<sup>ハ</sup>さ<sup>ま</sup>等<sup>ハ</sup>か<sup>ら</sup>。○布<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>夜<sup>ハ</sup>賀<sup>ハ</sup>斯<sup>ハ</sup>  
ぬ<sup>字</sup>也。○今<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>記<sup>傳</sup>よ<sup>論</sup>あり<sup>見</sup>べ<sup>し</sup>。



えぬ也。但し腕と脚を ○伊遠斯那世ハ。寐を宿と云

ふやれぬ。斯ハ助辭。那世を前歌の那佐牟ナサムと同言れぬを。

此は寐よと云意ある故也。世とは云ふ也。埃囊抄人

を。下臈を志おほむ云と云ふを誤れり。多タは那須那佐

牟あどく多く云依よて。斯ハ助辭あること著き字や。

ちて阿夜加伎能と云ふ也。此までは永く此固小留り給

ひる。今々也吾を親まりふ。可美と寢給子と云ふ。其状を

演ふ依りぬ。○登與美伎也。豐御酒也。此を朝倉宮段。大

后御歌ふ。多加比加流。比能美古爾。登余美伎。多氏麻都良

勢。万葉六。將還來日相飲酒曾。此豐御酒者。十九も如

はと丈夫之禱豐御酒爾吾醉爾家里。吾字ハ甚あど何依

を思ふ。豐御酒也。酒を祝て云稱也。○多氏麻都良世

は。獻まふ也。礼を延て良世とち多此也。御自大御酒坏を

指舉てと始ふ何まバ。人よ仰せて。獻まると詔ふよを非交。

此獻まむ。飲賜へせ云意ふて。男神御自ミツカラ給。免賜ふ御言

あ也。故契冲ぐ。聞食せと云ふ也と注せる。とく叶へ也。右

引る朝倉宮。大后の御哥ハ比能美古爾とあれむ。人よ仰せ賜ふとき也。ちて飲賜子と云こ

ぞを。奉まると云は。麻章禮也云也同意也。麻章流也ハ。他

れ奉る残ぬ。自ら飲食賜ふをも。通ハしと云は。奉るも其

如く。通はして。自ら飲食賜ふよめ云免ぬ。續紀ふ。夜須美

斯留和己於保支美波。多比良氣久。那何久伊末之氏。等與



美岐麻都流おもと元正天皇の聖武天皇此麻都流も獻る  
小て飲ノミ多シ了シふと云意イをレ也ナリ。中昔の物語書おどよ衣服を  
貴人よ他此著せ奉るをも奉  
ゆと云ひままと著キて坐イ候コト。はと云ひまと著て坐候こと  
をも某を奉れ也おぞ云り。ちて今かく御酒ミ字キ勸ス免賜  
ふは。今世俗ナカホふいはゆ。中直ナカホゆの盃サカキ此心ココロば予オノふ似ニゆ。  
○夜知富許能と云と也。下五句は。上三首此例レ據テ。篤  
胤ミコが私シよ補ホへゆレあり。其シは前段マヘ此二首ニは。ゆと此前の御歌  
も共トモふ。終ハジメの句コトを同トじレんまむト。此御歌も。必カナラち終ハジメと也ナリけ  
むを落オチせゆレおを疑ウタガひシ。然るを下よ。此謂神語とあるを  
四首を總終て謂れる文おゆを  
以て知チられレとリ。猶ナカ神語カミコト哥カ  
と云ふレ処トコロよ注ツケを見ミるベシ。○宇伎ウキ由ユ比ヒ也ナリ。盃ウキ結ユヒよテ。女神  
男神カミコト多シぐヒふ。御盃ミサカキをレちカ交カして。今イマと也ナリ。長トシふ心ココロ變カらじ

を結ユヒ固カタ免賜メふ契チキを云レ也ナリ。師云。宇伎由比也。宇気比也。あり  
と云れおまど。宇気比とハ異  
也ナリ。ちて盃ウキを宇伎ウキと云レ予オノる例レ也ナリ。朝倉宮段三重ウツ姦メが歌。  
尔多麻宇伎と賦ヨメ也ナリ。王盃あり。猶其處ふ云ふは。今云ふ。雄畧  
天皇卷見る  
し。結ユヒハ。標結シメユフおど此結ユヒふテ。事コトを定免固カタむル意イ也ナリ。世俗  
謂  
也ナリ。結ユヒ納ノメの由ユ比ヒも此意イあり。或人オノヒトもひいままをレ言イ入イの誤アヤマ  
ありと云レ也ナリ。中ナカくヒひひぐぐことお也ナリ。○和名抄ワナヒナヒラキ遊ユ牝メ豆流マメナガ  
比ヒ俗ソコ云レ由ユ比ヒとレあるレ也ナリ。字音ジヤウオンさらららばら。今世イマノヨはレでもナリ。万マン此事コト  
とモ。あらむレ此コノ由ユ比ヒ意イもレ非ヒ交カ。今世イマノヨはレでもナリ。万マン此事コト  
を契チキ也ナリ。固カタむル也ナリ。ゆレしレふハ。盃サカキを差交サシカハへレおをゆレるハ。神代  
をゆレめレ此風儀フウギお也ナリ。ゆレめレ。或人オノヒト今世イマノヨの盃サカキ事コトとレさし交カへレを  
也ナリ。学マナブびてゆレゆレりと。○宇那賀氣理氏ウナガキリノウヂハ。師説シヤクよレ互タビふ項カウ  
云レるレ也ナリ。中ナカくヒ非ヒ也ナリ。○宇那賀氣理氏ウナガキリノウヂハ。師説シヤクよレ互タビふ項カウ  
ふ手を懸カケてレ親シヤクくヒ竝居ナヒヤルを云レとレ也ナリ。信シヤクふ然シヤクるレはレ。但タシし項カウ  
も手を

掛居<sup>カケイ</sup>を言の本此意<sup>コノコト</sup>ふて、必しも然<sup>シカ</sup>。万葉十八<sup>マンヤクハチジウハチ</sup>。多豆佐波<sup>タマシバ</sup>。利<sup>リ</sup>。宇奈我<sup>ウナガ</sup>既利<sup>イケリ</sup>爲<sup>ナリ</sup>氏<sup>ウヂ</sup>。於母保<sup>オモホ</sup>之<sup>ノ</sup>吉<sup>ヨシ</sup>。許登母<sup>コトノボ</sup>加多良比<sup>カタルヒ</sup>とある。上下此語<sup>コノコト</sup>よて、其意<sup>コノコト</sup>あられと<sup>シ</sup>。或人の此言<sup>コノコト</sup>を、天<sup>アマ</sup>翔<sup>トビ</sup>ヒゲ<sup>ヒゲ</sup>。○<sup>イネテ</sup>至今<sup>イマニ</sup>は、篤胤<sup>アツノ</sup>云<sup>ク</sup>。此<sup>コノコト</sup>を記傳<sup>キテ</sup>。解<sup>トキ</sup>を缺<sup>カ</sup>きぬり。故今此<sup>コノコト</sup>を解<sup>トキ</sup>辨<sup>ハ</sup>ずむと<sup>シ</sup>。其<sup>コノコト</sup>を今<sup>イマ</sup>は、古事記<sup>コトワザキ</sup>を撰<sup>ヒ</sup>げり。安麻呂<sup>ヤスマロ</sup>主<sup>ヌシ</sup>此詞<sup>コノコト</sup>よて、當世<sup>トクヨ</sup>をけせ依<sup>ヨ</sup>今<sup>イマ</sup>。古事記<sup>コトワザキ</sup>の本<sup>ホ</sup>採<sup>ヒ</sup>れ依<sup>ヨ</sup>古<sup>コ</sup>記<sup>キ</sup>。本<sup>ホ</sup>と<sup>ト</sup>有<sup>ア</sup>し詞<sup>コト</sup>。然<sup>シカ</sup>るよてめ、其<sup>コノコト</sup>古記<sup>コノコト</sup>字<sup>ジ</sup>記<sup>キ</sup>し傳<sup>デン</sup>ある人<sup>ヒト</sup>此詞<sup>コノコト</sup>。はと此<sup>コノコト</sup>故事<sup>コトワザ</sup>を語<sup>コト</sup>傳<sup>デン</sup>とる。當昔<sup>トクノミ</sup>とりの詞<sup>コト</sup>を依<sup>ヨ</sup>を記<sup>キ</sup>せ依<sup>ヨ</sup>の詳<sup>コト</sup>あらび。何<sup>ナニ</sup>ふとるも、永<sup>トキ</sup>く須世<sup>スセ</sup>理<sup>リ</sup>毘賣<sup>ヒメ</sup>命<sup>ノミ</sup>此<sup>コノコト</sup>處<sup>トコロ</sup>。留<sup>ル</sup>止<sup>ト</sup>住<sup>ヰ</sup>賜<sup>ミ</sup>ふこぞ哉<sup>ナニ</sup>云<sup>ク</sup>。○鎮座<sup>チンザ</sup>。鎮<sup>チン</sup>を師<sup>シ</sup>志豆<sup>シマ</sup>母<sup>ノ</sup>理<sup>リ</sup>と訓<sup>ク</sup>れた<sup>ト</sup>まども、然<sup>シカ</sup>

訓<sup>ク</sup>べき證<sup>シ</sup>を未<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>ぬ。舊<sup>キウ</sup>訓<sup>ク</sup>。是<sup>コノコト</sup>を常<sup>トキ</sup>ふ某<sup>ナニ</sup>神<sup>カミ</sup>某<sup>ナニ</sup>處<sup>トコロ</sup>ふ鎮座<sup>チンザ</sup>をの如<sup>ノ</sup>く志豆<sup>シマ</sup>麻理<sup>マリ</sup>と訓<sup>ク</sup>べし。云<sup>ク</sup>。云<sup>ク</sup>。云<sup>ク</sup>。只<sup>シカ</sup>其<sup>コノコト</sup>處<sup>トコロ</sup>ふ坐<sup>イマス</sup>と<sup>ト</sup>。此<sup>コノコト</sup>み心得<sup>ココロエ</sup>るは細<sup>コト</sup>しからび。鎮<sup>チン</sup>とは、他<sup>コト</sup>處<sup>トコロ</sup>ふ遷<sup>ウツリ</sup>往<sup>イデ</sup>坐<sup>イマス</sup>じて、其<sup>コノコト</sup>處<sup>トコロ</sup>ふ留<sup>ル</sup>止<sup>ト</sup>給<sup>タマフ</sup>ふ意<sup>コト</sup>よ云<sup>ク</sup>言<sup>ハ</sup>ふ。志豆<sup>シマ</sup>麻理<sup>マリ</sup>と。登<sup>ノボ</sup>杼<sup>シ</sup>麻理<sup>マリ</sup>と通<sup>ト</sup>ずり。其<sup>コノコト</sup>例<sup>コト</sup>を。神祇<sup>カミキ</sup>官<sup>ツカサ</sup>坐<sup>イマス</sup>八<sup>ヤチ</sup>神<sup>カミ</sup>。此<sup>コノコト</sup>中<sup>ナカ</sup>の玉<sup>タマ</sup>留<sup>ル</sup>魂<sup>タマシ</sup>ハ。玉<sup>タマ</sup>積<sup>ツク</sup>産<sup>ムス</sup>靈<sup>スビ</sup>也<sup>ナリ</sup>。魂<sup>タマシ</sup>を鎮<sup>チン</sup>むる意<sup>コト</sup>此<sup>コノコト</sup>御<sup>ミ</sup>名<sup>ナ</sup>あれむ。共<sup>ト</sup>ふ多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>都<sup>ツ</sup>米<sup>メ</sup>牟<sup>ム</sup>須<sup>ス</sup>毘<sup>ヒ</sup>と訓<sup>ク</sup>べき也<sup>ナリ</sup>。留<sup>ル</sup>字<sup>ジ</sup>積<sup>ツク</sup>と<sup>ト</sup>。以<sup>ヨ</sup>て、神<sup>カミ</sup>留<sup>ル</sup>坐<sup>イマス</sup>と<sup>ト</sup>。非<sup>ヒ</sup>あると<sup>ト</sup>。知<sup>チ</sup>げし。ま。祝<sup>イハヒ</sup>詞<sup>コト</sup>ふ。高<sup>タカ</sup>天<sup>アメ</sup>。原<sup>ハラ</sup>は神<sup>カミ</sup>留<sup>ル</sup>坐<sup>イマス</sup>と<sup>ト</sup>。依<sup>ヨ</sup>字<sup>ジ</sup>も、統<sup>トウ</sup>紀<sup>キ</sup>の詔<sup>ミコトノコト</sup>よむ。神<sup>カミ</sup>積<sup>ツク</sup>坐<sup>イマス</sup>と<sup>ト</sup>。あま。相<sup>アイ</sup>照<sup>テ</sup>して、此<sup>コノコト</sup>留<sup>ル</sup>も積<sup>ツク</sup>め。ち。都<sup>ツ</sup>麻<sup>マ</sup>理<sup>リ</sup>ハ留<sup>ル</sup>住<sup>ヰ</sup>る意<sup>コト</sup>ある故<sup>ナリ</sup>。共<sup>ト</sup>ふ都<sup>ツ</sup>麻<sup>マ</sup>理<sup>リ</sup>と訓<sup>ク</sup>べし。留<sup>ル</sup>字<sup>ジ</sup>を積<sup>ツク</sup>み。借<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>あり。積<sup>ツク</sup>字<sup>ジ</sup>よて訓<sup>ク</sup>。此<sup>コノコト</sup>を美<sup>ミ</sup>留<sup>ル</sup>字<sup>ジ</sup>を書<sup>キ</sup>る也<sup>ナリ</sup>。積<sup>ツク</sup>を。知<sup>チ</sup>げ。留<sup>ル</sup>字<sup>ジ</sup>よて義<sup>コト</sup>を。知<sup>チ</sup>べし。此<sup>コノコト</sup>を美<sup>ミ</sup>麻<sup>マ</sup>命<sup>ノミ</sup>此<sup>コノコト</sup>此<sup>コノコト</sup>困<sup>クマ</sup>ふ降<sup>クダ</sup>と<sup>ト</sup>。乃<sup>ナリ</sup>ふ。對<sup>タイ</sup>へる。天<sup>アメ</sup>神<sup>カミ</sup>の降<sup>クダ</sup>らびして。天<sup>アメ</sup>

小留まト正坐スをシれまバ鎮坐スと云フ通ヘ正。万葉五子。海原の邊ハラも奥オキも神豆麻利カミマツリ。うしはきいまは諸の大御神ミコとち云フ。此神豆麻利も鎮坐スをいハす。是レ右ミ此義字コトちをシるハ。然ルをカの祝詞イハヒある神留カミマツリを師ウシの集會アヒ坐ス此神カミ於マ正マと相照アヒして知ルべし。海ウミの奥オキ邊ヘに神カミ此集アヒまり坐スべき処トコロよあらハ。此コト海邊ウミノヘありハ。奥オキありハ。島シマあどヨ鎮マツリ坐ス神カミとちをシ云フ。はまハ今イマ此コト大神オホカミをシ倭ヤマトへ往ユキ坐スむセせしコトを思オモ止ト正マて。何處ナニトコロよも往ユキ了スさハ。永ナガく出雲イセ固ツ小留トモ正マ住スミ賜タマふを云フ。師ウシ説イハふ。倭ヤマト固ツ小鎮トモ座マあハ。出雲風土記イセノフチノキよ。所造ツクラレ天下ツクシ大神大穴持命オホアナノミチノミコト詔ミコトノコト八雲立出雲固者ヤチノクモノタテノイセノツクリノミコト我ワガ靜坐シヅカマツリ固ツとハ正マ。今イマ云フ。採ツクまクむハ。彼カノ處トコロをシ見ミべし。日代宮ヒノヨロミヤ段タテ小倭建命ヤマトノタケノミコト崩坐カタガリて。伊

勢セの能ノ煩ワザ野ノ葬マツル奉マツルしを白鳥シラトリ化ナリて飛トビ翔カケ行リて。河内カハチの志シ幾キよ留マツリ賜タマふ故ユヘ。其地ソノチ小御陵ミコノミササを作シて鎮坐スし米コメ死シ。と有ルも。留マツリ奉マツルし意イハ正マ。崇神タケノカミを遷ウツリ却サツふ祝詞イハヒ。山川ヤマカハ乃廣久清地ノヒロキヨキヨチ爾ニ遷ウツリ出坐イデ氏ウヂ神奈我良鎮坐シ世止セトドモ稱言コトワハス竟奉マツルとハ正マ。永ナガく其處ココ小留トモりて。他ホカ子コ出還イデ正マ賜タマふハ云フ。意イハ正マ。出雲固造イセノツクリノミコト神持命カミノミチノミコト乃申給久皇御孫命ノノノミコトノミコト乃靜坐シヅカマツリ牟大倭固ムオホヤマトノツクリノミコト申天云ウケテ。万葉二ニ小高市皇子命コノタカノミコト葬マツル奉マツルしコトを朝毛吉木アサノモヨシキ上ノ宮ミヤ乎常宮ノトコノミヤ等定奉而神隨安定座トコノミヤニシヅカマツリ奴ヌ崇神タケノカミ天皇紀ミコトノキよ。爰ココ○神語歌本カミノコトノウタノホン小以忌コノイミ危ヤブ鎮坐ス於和珥武鏖坂ニ上ノとハ正マ。○神語歌本カミノコトノウタノホンは神語カミノコトとハみ有ルを歌字ウタノジを篤胤ツクシグ私シ小補トモ予コノるハ云フ。そは記傳キデンよ。御紀ミキ。神の詔カミノミコトふ御言ミコトノコトを。神語カミノコトと云フ。依ヨとハ數見ヒツミ也。大嘗祭式オホノチノマツルシキよ。雜器者タガヤクシ神語カミノコト曰イハ。由加物ユカモノ。まハと神語カミノコト所謂イハレ八開手ヤチヒラテ

是也。と何ゆゑとを引て。加牟許登と訓み。彼此一ツ解ま  
ぬまぜ。此を決して彼を別よて。此ある歌をも悉末を許  
登能加多理碁登母。許遠婆と終と依故よ。下ふ出る夷振  
思罔歌と名け來し類よて。右の四首をむ。殊に神語歌  
をいひ傳と正を所念れむゆり。其在雄畧天皇卷ふ。三重  
姝歌。太后御歌。天皇大御歌ともふ。末字此と同く許登能  
加多理碁登母。許遠婆と終免て。此三歌者天語歌也。と何  
依を思合申はし。此天語をも師を阿麻碁登と訓。彼段は  
歌どもは。姝が歌ふ。天よ坐は神の天地を成坐る古事を  
裡ふ含免て。語事もと歌へ依故ふ。天語歌といひ。此歌ぞ

もは男女神とち。互ふ語事もて歌給する故よ。神語歌と  
云れはし。あふ天語哥の下  
ふ注ふを見べし。

百

故此大因主神。娶胸形奥津宮

坐神。多紀理毘賣命而令生給

出子。味鉏高日子根神。言主神。

次妹高比賣命。亦名下照。亦名

マラスオホクラヒメノミコトトマタノミナハマラスアダカ  
謂大倉比賣命亦名謂阿陀加

ヤヌシタキキヒメノミコトトコノカミノ  
夜努志多伎吉比賣命此神出

マシントコロラニイマイフタキト  
坐處於今云多伎也

胸形奥津宮坐云々此御事ハ既上小見えと也第三十

傳見るウケはて大國主神の此神小娶賜へるあとを信ウケびし

て左右カニカク云枉イヒヒるハ師言此如く後世の私事ワタシ也此神ハ

男大神の直タテ此御子大國主神ニ四世孫ニある故ニ時ノ代ノ加  
あむべと思へるニ神代ノハさること常多し何レ疑ハ

むまと無形神あどク云後世の私言 神名式ノ伯耆國會  
を固く守りて云ニや皆非事あり

見郡ノ大神山神社とハあるニ出雲風土記ニ火神岳とハ

依山の社ニて此岳ハ謂ハ依伯耆大山ノ依ガ此山ノあ

第七十六段ノ委ク此社ノ竝テ式ノ胸形神社をハ舉ラ

れと依字思ふニ大神山ニ大三輪山ト訓テ大國主神を

祭ミる社ヲ依シ然ルを西行ガ撰集抄ニ伯耆國ノ大

はしまリ利益ノ何レとあるニ大智ノ明神ト申テ神ノお

俊方ト云ル依リ取リ野ノ出テ鹿ヲ符ル程ノ小ノ例トりモ

鹿ノおハとテ皆思ひ外射留ふ正扱此鹿ノも取

寸ノ尊ノ像ノ矢ヲ射立て鹿と見扱るニ地藏を奉りル五

奉りて泣お免きけまどもちらまうひあしやガて手扱ま

のら元どり切て。我家を堂よ作て。永く殺生を留免侍  
正よき。はる程よ。称徳天皇の御時。社よい。をひ奉れと云  
託宣侍て。やぐて堂を社よ為して。大智明神とぞ申侍る。  
利益新おま。彼処の砂よも。夕ふをさう上りて。朝よ  
下りて。乃お。下向此相を示。彼岡の松。明神の御方  
よ向ひて。皆お。びき。帰依。此姿を現。ハし侍ると。や  
心お。き。草木。砂。ま。でも。帰依。し。奉。る。事。ば。有。グ。と。く。ぞ。侍  
る。云。く。と。云。る。た。例。の。佛。者。此。説。お。ま。バ。慥。あ。る。證。を。ハ。為  
の。と。し。然。ま。ぞ。此。ハ。神。靈。或。を。人。靈。れ。ど。此。や。ご。と。お。き。が。  
地。藏。よ。憑。り。て。験。を。あ。ら。わ。し。さ。て。大。智。明。神。を。齋。を。れ。と。  
依。あ。り。此。類。い。と。多。う。り。神。は。て。此。多。紀。理。毘。賣。命。小。御。娶  
社。考。よ。も。此。説。を。引。ま。と。て。は。て。此。多。紀。理。毘。賣。命。小。御。娶  
て。と。有。は。や。の。て。須。世。理。毘。賣。命。小。娶。賜。へ。る。を。云。也。其。由  
次。段。小。注。を。見。ふ。知。げ。し。○。味。鉏。高。日。子。根。神。味。ハ。阿。遲。鉏  
は。志。貴。と。も。須。伎。と。も。訓。げ。し。○。阿。遲。鉏。と。作。ま。ぞ。多。く。阿。遲  
志。貴。を。書。き。書。紀。よ。味。耜。此。云。阿。膩。須。岐。を。見。え。同。紀。の。哥  
ま。と。出。雲。国。造。神。賀。詞。同。国。風。土。記。神。名。式。お。ど。ふ。こ。あ。須

伎と有て。志貴とを無まど。古事記よ。志貴とのみ有ま。バ  
師言の如く。鉏を古は。須伎とも。志伎とも。通をして云し。  
あるべし。今も秋田人。御名此義を。師説ふ。いはど思得  
とを耜をレキヤ云也。御名此義を。師説ふ。いはど思得  
後ぞ。試よ云は。阿遲ハ可美と同意。て。稱名。式よ。撰津  
阿遲速雄神社。志貴を磯城よ。石し。築と。城の固き  
と云もあり。志貴を磯城よ。石し。築と。城の固き  
残以賀と。る名よ。也。懿徳天皇の御名。大倭日子。鉏友。命。御  
鉏師。木津日子の師。木と。一。あるべし。ま。と。崇。神。天。皇。此。御  
子。豊。城。入。日。子。命。豊。鉏。入。日。女。命。御。同。母。あ。り。此。も。豊。城。の  
城。と。豊。鉏。の。鉏。と。同。意。を。聞。也。お。ま。ら。鉏。を。磯。城。と。け。る。高  
扱。あ。り。師。木。を。も。書。紀。よ。を。磯。城。と。け。り。此。意。あ。り。高  
日子根を。天津日子根。あ。ぞ。同。稱。名。あ。也。出。雲。風。土。記。よ  
省。犯。て。○。一。言。主。神。こ。此。御。名。の。義。を。雄。畧。天。皇。卷。四。年。二  
う。け。也。○。一。言。主。神。こ。此。御。名。の。義。を。雄。畧。天。皇。卷。四。年。二  
月。此。處。小。委。く。注。ふ。げ。し。第。百。七。七。段。よ。且。く。ハ。云。べ。し。扱  
あ。を。味。鉏。高。日。子。根。神。の。亦。名。と

定、とること。土佐、国風土記。土佐、高賀茂、大神、為、一言  
主、余、一、説、曰、大、穴、六、道、等、子、味、鉏、高、彦、根、等、と、有、よ、據、ま、る  
精、と、徴、よ、云、る、が、如、し、師、を、此、説、を、非、あり、せ、云、れ、お、れ、ど  
精、う、ら、び、此、も、雄、畧、天、皇、卷、よ、委、く、注、ふ、字、見、て、知、べ、し、  
○高比賣命名義師云兄神の高日子小對子る異お依事  
取し。陽成天皇紀元慶七年十二月伯耆国正六位上。○下  
天照高日女神授從五位下とあるを此神ふや。○下  
照比賣命。照を古事記よ。或容貌此美麗を云る。今一の  
り。そを第百七段。○大倉比賣命。おを下照比賣命の亦名  
の傳よ云べし。○大倉比賣命。おを下照比賣命の亦名  
と定、と依由を。舊事紀よ。下照姫命坐倭国葛上郡雲櫛社  
坐ある社ハ。神名式よ。葛上郡大倉比賣神社。一、名、雲、と有、  
ふて論おし。此社ハ。今巨勢河合村と云よ在て。宇  
久比須宮と号ふせ。或書よ云へり。名義ハ。  
いまご思ひ得え。○阿陀加夜努志多伎吉比賣命。此を下

照姫命の亦名と知まざる由を。ま、於、出、雲、風、土、記、よ。神門郡  
多伎郷。郡家南西北里。所造天下大神之御子。阿陀加夜努  
志多伎吉比賣命坐之。故云多吉。神龜三年。とあり。眞龍解  
よ。此を決免て高比賣お。阿陀加夜努志ハ。大高屋主お  
也。阿と於と。景行天皇紀よ。日向高屋宮と云もありて。宮  
造ハ高妃を宜と。多伎吉ハ。御母の名多紀理也同じ。多  
紀。水の速多云て多紀理多也云る實然る説あり。○多伎  
紀。都多伎吉。とお同意あり。郷ハ。風土記抄よ。併奥田儀村。口田儀村。多伎村等。以爲一  
郷也云。多伎村加夜堂。有多伎吉比賣神社と見也。風土  
記よ。竝在神祇官也云る社等此中よ。保乃加社の次よ。多

吉社とあるを。神名式に多伎神社とあり。風土記抄に多伎、多伎、大神也。多伎、社とあるを。式に多伎、藝神社とあり。風土記抄に、多伎、藝神社とあり。田伎、郷田儀村、大須大明神と云るを。然説おまど、祭神を神魂、命子、午日、命と云、依ハ、眞竜、ガ辨へ、こる如く、非こと。比布知、社、此、次、よ、多、吉、社とあるを。式に上り、舉、多、依、多伎、神社の次、ふ、同社、大穴持、神社、を、依、社、あり。風土記抄に、多伎、大明神、併、兩社、為、一社、を、あり、眞竜、乃、多、不在、神、祇、官云、按、よ、大穴持、神と、多、伎、吉、比、賣、命、あり。多、伎、不在、神、祇、官を、依、社、此、中、よ、も、多、伎、社。抄、よ、多、伎、郷、須、奈、谷、多、伎、社と有、何、も、此、比、賣、神、を、依、社、と。

カレソノアヂスキタカヒコトネノミコトマデミロゲ  
 故其味鉏高日子根命迄御鬚

ヤツカオフルミコトズカヨハサヨルヒルイタクネナキマシ  
 八握生御辭不通晝夜甚哭坐  
 キカレツクリタカキヤヲテシメマサテタテタカハシラ  
 矣仍造高屋而令坐出建高椅  
 テノボリクダリヒタシマツリキソコヲイフタカギシトマタ  
 而登降養奉出其處云高岸亦  
 ミオヤノミコトミコヲノセフネニテ平テメグリヤソ  
 御祖命御子乘船而率巡八十  
 シマヲテドモウラカシタマヘナホズヤマナキ  
 島而雖宇良加志給尚不止哭





坐矣。於是大神告御子出哭由。  
而夢願坐。則夜夢見御子辭通。  
矣。寤而問出時。白御津矣。何處。  
然云問出則。即立去御祖命出。  
御前出坐而。至雷石川度坂上。

而此處也。白給矣。爾時汲出其  
津出水而。御身沐浴矣。故其處  
云三津。即有正倉。故因造奏神  
吉事。參向朝廷時。汲出其水而  
用出。依此。今妊婦者。不倉彼村。

ノイネヲモシクラヘバウマールコズモノイハ  
出稻若倉則所生出子不言也。

此段ハ。出雲風土記ある高岸郷。三津郷の故事を採合せ  
て記せる也。既ふ徴よ云ふが如し。○御鬚ハ握生云々  
ハ。須佐之男大神の御事を。八拳須至于心前哭伊佐知志  
矣と見え。第三十段ハ。垂仁天皇ハ御子。火牟智別王。既及  
三十而雖生垂八掬鬚。尚常如兒泣而不問眞言とあるハ  
相似とゆ事ハ。○高椅ハ。今俗ハ階子と云物也通えと  
也。垂仁天皇卷八十七年の。○養奉之ハ。比多斯麻都理伎  
也。訓法ハ。玉垣宮段ハ。日足奉とある。此字ハ意ハ。委  
七第

百六十三段  
○高岸ハ。風土記ハ。神門郡高岸郷。郡家東北  
二里とあり。和名抄ハ。神門郡ハ高岸郷あり。今本ハ高  
西天神村。東北渡橋村。中阿利原。以  
為高岸郷。今入塩谷村。中と云へり。○御祖命ハ。御母多紀  
理毘賣命を申は。御母を御祖を申は由也。○八十嶋とは。  
上小嶋之八十嶋とも有る如く。多加る嶋を云。率巡る  
也。ハ。垂仁天皇卷よ。本年智和氣御子此事。茂率遊其御子  
之狀者。在於尾張之相津。二俣相作。二俣小舟而云々。とあり  
依よ同心。○宇良加志ハ。明宮段ハ。天皇宇羅宜是所獻之  
大御酒而御歌曰云々。若櫻宮段ハ。於大御酒宇良宜而大  
御寢坐也。とある。宇良宜と同言よ。師説の如く。びぐろ

ふ心れも忘ろく。浮立を云と聞ゆる。宇良ハ心宜を活  
辭あるはし。眞竜解み此の宇良加志を舟よけて宇良宜  
は。おのぢのら然るを云ひ。宇良加志ハ。令宇良宜を云て。  
此を哭を止て。宇羅宜給ふはく。安依あて。契沖ガ雜記  
をてうら加はと云も。此宇良加志よ。手を加へて云よ。や  
日本紀よ。推字をウラカスと訓て。テウラカスと云も。此  
ふ同じきふ。○大神とて。大因主神を申せて。○告御子之  
哭由而。天神とちよ。告賜ふれり。○夢願坐とて。御子之  
哭由を。御夢よ。誨賜牙也。願坐るあて。崇神天皇の御代よ。  
物の一種も登ざて。あう。百物知人。とちよ。何あ依神の  
御心といふ事を。トはし。免給ふよ。出る神の御心も無り  
あう。ぞ。忌殿よ。御隠て。坐て。御夢の告を請給へるあど。即  
神代よ。早く。大因主神。此始米置とる。牙依神事。れり。なり。

神武天皇倭よ。征入給ふ時よ。賊軍強うりし。○則夜を。  
ぞ。御寝まして。天神よ。御夢の誨を請給ひ。○則夜を。  
曾能余と訓るし。○夢見御子辭通矣。は。やめて。天神とち  
此御靈威よ。依て。れり。○寤而問之ハ。御子よ。大因主神の  
問給ふれり。○白御津矣ハ。大因主神よ。御子。此答給ふ御  
言あて。但しかく。白給ふ時。いはど。御津て。ふ地名。おき  
時れ。ま。ぞ。も。津を稱。牙て。御津と。詔へる。れり。○何處然  
云と。問給へるも。大因主神あて。○御祖命の御前を。立去  
出坐て。や。は。其御膝の邊よ。馴遊び。居給ひ。む。御父神  
此志の問給ふ。故。其津を。指をし。牙。白さ。む。と。て。立去。出  
坐る。れり。○至留石川度坂上。而云。石川度。や。石川を

向<sup>サキ</sup>牙<sup>タ</sup>度<sup>タ</sup>依<sup>タ</sup>由<sup>タ</sup>よ<sup>タ</sup>を<sup>タ</sup>非<sup>タ</sup>交<sup>タ</sup>。石<sup>イシ</sup>川<sup>カハ</sup>邊<sup>ノ</sup>此<sup>コノ</sup>義<sup>ヲ</sup>ふ<sup>テ</sup>。其<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>邊<sup>ノ</sup>亦<sup>モ</sup>依<sup>レ</sup>坂<sup>ニ</sup>上<sup>リ</sup>至<sup>リ</sup>留<sup>リ</sup>坐<sup>テ</sup>。其<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>川<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>指<sup>テ</sup>。御<sup>ノ</sup>津<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>詔<sup>ヲ</sup>牙<sup>ヲ</sup>る<sup>ル</sup>由<sup>ル</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>。</sup>前<sup>ニ</sup>ふ<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>得<sup>テ</sup>て<sup>モ</sup>本<sup>ニ</sup>石<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>坂<sup>上</sup>至<sup>リ</sup>留<sup>リ</sup>坐<sup>テ</sup>を<sup>テ</sup>石<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>至<sup>リ</sup>留<sup>リ</sup>坂<sup>上</sup>而<sup>シ</sup>と<sup>モ</sup>文<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>成<sup>テ</sup>と<sup>リ</sup>し<sup>テ</sup>誤<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>。</sup>  
け<sup>レ</sup>て<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>川<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>眞<sup>ニ</sup>龍<sup>ト</sup>解<sup>キ</sup>よ<sup>。</sup>仁<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>郡<sup>ノ</sup>戀<sup>山</sup>郡<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>正<sup>ニ</sup>南<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>里<sup>ニ</sup>也<sup>。</sup>  
古<sup>ク</sup>老<sup>ク</sup>傳<sup>ヘ</sup>云<sup>フ</sup>和<sup>邇</sup>戀<sup>阿</sup>伊<sup>村</sup>坐<sup>ス</sup>神<sup>王</sup>日<sup>女</sup>命<sup>而</sup>上<sup>リ</sup>到<sup>リ</sup>爾<sup>時</sup>玉<sup>日</sup>女<sup>命</sup>以<sup>テ</sup>石<sup>塞</sup>川<sup>不</sup>得<sup>エ</sup>會<sup>フ</sup>所<sup>戀</sup>故<sup>云</sup>戀<sup>山</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>。今<sup>云</sup>此<sup>山</sup>を<sup>抄</sup>よ<sup>俗</sup>呼<sup>フ</sup>云<sup>舌</sup>振<sup>山</sup>と<sup>あり</sup>。阿<sup>伊</sup>村<sup>也</sup>。三<sup>津</sup>郷<sup>中</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>。</sup>戀<sup>山</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>落<sup>依</sup>水<sup>を</sup>阿<sup>伊</sup>川<sup>を</sup>い<sup>ふ</sup>。此<sup>川</sup>あ<sup>る</sup>は<sup>し</sup>と<sup>云</sup>ゆ。あ<sup>レ</sup>を<sup>猶</sup>と<sup>く</sup>考<sup>ふ</sup>べ<sup>し</sup>。○其<sup>津</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>上<sup>ノ</sup>謂<sup>也</sup>依<sup>石</sup>川<sup>也</sup>。儲<sup>其</sup>水<sup>を</sup>汲<sup>出</sup>て<sup>御</sup>身<sup>を</sup>沐<sup>浴</sup>給<sup>牙</sup>依<sup>レ</sup>也<sup>。</sup>○三<sup>津</sup>也<sup>。</sup>風<sup>土</sup>記<sup>よ</sup>仁<sup>多</sup>郡<sup>三</sup>津<sup>郷</sup>郡<sup>家</sup>西<sup>也</sup>。

南<sup>九</sup>五<sup>里</sup>大<sup>神</sup>大<sup>穴</sup>持<sup>命</sup>御<sup>子</sup>阿<sup>遲</sup>須<sup>枳</sup>高<sup>日</sup>子<sup>命</sup>云<sup>く</sup>。故<sup>云</sup>三<sup>津</sup>。神<sup>龜</sup>三<sup>年</sup>改<sup>字</sup>三<sup>澤</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>。即<sup>此</sup>の<sup>云</sup>く<sup>と</sup>切<sup>と</sup>る<sup>ハ</sup>和<sup>名</sup>抄<sup>よ</sup>。三<sup>澤</sup>郷<sup>と</sup>見<sup>ゆ</sup>。風<sup>土</sup>記<sup>抄</sup>よ<sup>併</sup>湯<sup>村</sup>槻<sup>屋</sup>北<sup>原</sup>尾<sup>原</sup>石<sup>村</sup>比<sup>羅</sup>田<sup>鴨</sup>倉<sup>上</sup>鴨<sup>倉</sup>四<sup>日</sup>市<sup>原</sup>田<sup>鞍</sup>挂<sup>乙</sup>社<sup>大</sup>吉<sup>川</sup>内<sup>三</sup>成<sup>堅</sup>田<sup>大</sup>谷<sup>高</sup>尾<sup>大</sup>馬<sup>來</sup>小<sup>馬</sup>來<sup>下</sup>河<sup>井</sup>上<sup>河</sup>井<sup>等</sup>九<sup>三</sup>所<sup>為</sup>三<sup>澤</sup>と<sup>あり</sup>。○即<sup>有</sup>正<sup>倉</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>。風<sup>土</sup>記<sup>よ</sup>同<sup>郡</sup>の<sup>在</sup>神<sup>祇</sup>官<sup>を</sup>有<sup>る</sup>。社<sup>よ</sup>或<sup>澤</sup>社<sup>を</sup>有<sup>る</sup>是<sup>也</sup>也<sup>。</sup>風<sup>土</sup>記<sup>抄</sup>よ<sup>阿</sup>遲<sup>須</sup>伎<sup>高</sup>日<sup>子</sup>命<sup>曰</sup>大<sup>森</sup>大<sup>明</sup>神<sup>在</sup>三<sup>澤</sup>郷<sup>原</sup>田<sup>村</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>。本<sup>を</sup>三<sup>津</sup>社<sup>と</sup>稱<sup>ス</sup>也<sup>。</sup>を<sup>此</sup>も<sup>神</sup>龜<sup>三</sup>年<sup>よ</sup>三<sup>澤</sup>神<sup>社</sup>也<sup>也</sup>。  
紀<sup>よ</sup>貞<sup>觀</sup>十<sup>三</sup>年<sup>十</sup>一<sup>月</sup>十<sup>日</sup>出<sup>雲</sup>國<sup>從</sup>五<sup>位</sup>上<sup>御</sup>津<sup>神</sup>正<sup>五位</sup>下<sup>と</sup>あり<sup>小</sup>朝<sup>熊</sup>神<sup>鏡</sup>沙<sup>汰</sup>文<sup>よ</sup>永<sup>保</sup>三<sup>年</sup>閏<sup>六</sup>月<sup>十</sup>五<sup>日</sup>出<sup>雲</sup>國<sup>司</sup>言<sup>上</sup>云<sup>鎮</sup>守<sup>水</sup>沢<sup>明</sup>神<sup>御</sup>正<sup>躰</sup>失<sup>坐</sup>者<sup>同</sup>月<sup>九</sup>日<sup>宣</sup>旨<sup>云</sup>宜<sup>仰</sup>國<sup>司</sup>祈<sup>請</sup>重<sup>經</sup>言<sup>上</sup>と<sup>い</sup>は<sup>ル</sup>事<sup>も</sup>見<sup>ゆ</sup>也<sup>。</sup>  
け<sup>レ</sup>て<sup>モ</sup>此<sup>神</sup>也<sup>。</sup>加<sup>ク</sup>哭<sup>坐</sup>る<sup>也</sup>也<sup>。</sup>本<sup>年</sup>智<sup>和</sup>氣<sup>御</sup>子<sup>の</sup>出<sup>雲</sup>。

大神の御崇ふて。哭坐ネキセ依ヨ準ナラ子コて思オモ子コ也。他神タカミヤ此コノ崇タカマよ也。  
有アりハ也。眞竜、説トクみ、強言キヤウゲンあがら三津ミツ也、斐伊ヒイ川カハ上ノりて、手名  
後ノチもモ廢クまシとシ依ヨを崇りて、此コノ御ミコ子コ事コト起トしトるウと云也。○因造ヰノツクとは、出雲ツク因ヰ造ツクは、出雲ツク因ヰ造ツク神カミ賀カハ詞コトを云ふ。  
委タテマくテ、第ダイ三サン十ジュウ八ハチ段ダン也。○神カミ吉キチ事コトハ、加カ牟ム余ヨ基キ登トと訓べし。  
傳ツタへテ注ツケせルを見べし。○延喜式ニギキシキ八ヤチ卷マキの末に載られトる。○出雲ツク因ヰ造ツク神カミ賀カハ詞コトを云ふ。  
此コノ詞コトを奏しテ、小コ朝廷ミコタマシに參向マツ依ヨあセ也。元正ゲンテイ天皇テンノウ紀キも、靈龜レイキ二  
年ニ二月ニ丁テイ己キ。出雲ツク因ヰ造ツク外ソト正マサ七ナナ位イ上ノ出雲ツク臣ミコト果ハタ安ヤス齋イハヒ竟マタ奏マツ  
神カミ賀カハ事コト云クと有を始始マシて、次ツギに見えぬ也。但し因史ヰノツク見ミる所也、  
かく後ノチあままぎ、奏マツし來まるハ、是コトを遙よ上代ノ代ノありハむ  
事コト云フも更ぬルを常の定れル事コトありシ故ユに記し洩さ  
まシ、因史ヰノツクに記されト依ヨ時トキを却りて、時トキに其事コトの無也シ也  
ともモ有リ依ヨ世ヨぞ有むハ、此コノ詞コトを奏也、儀ノ式シキあど、凡ソトて

此コノ賀カハ詞コトの事也、師シ此コノ神カミ寿ス後ノチ  
釈シヤクといふ書に説尽スさまとり、○此コノ詞コトを奏しテ、小コ參マツ向マツる  
時トキに、其ノ水ミヅを用ふハ、禊祓スヰハラヒに用ふる由に依る也、其ノを畏  
死シ天皇テンノウ命ノに大御ミコト前ノにあたりて、古フル事コトに大長イナガ妃コトバ文コトバを奏し  
誤アヤらじとの事コトに依る也、○妊ニ婦メノ者ハ、不ク食ク、彼ノ村ノ之ノ稻イネを生子ウマ  
此ノ年トシ長ナガクるまで、哭ネキて辭通コトぬルにあえあむこを忌てあり、  
○若ニ食ク、則ツ云フと、果ハしる高タカ日ヒ子コ根ネ命ノの御事コトにあえぬ言コト  
語ノに依る由にあり、是ノに依れテ、多オホ紀キ理リ毘ヒ賣メ命ノに、高タカ日ヒ子コ根ネ命ノ  
を妊賜メへ依間ホド也、此ノ村ノ之ノ稻イネを食賜メへル故ユに、生ナ坐マる御子ミコ  
此ノ言コト通カはレ、○如コトく思はレ、依ヨままぎ然らば、彼ノ御ミコ子ノ哭ネキ坐マ  
て言語コト給タざり也、他タカミ神ノに崇ある也、そレを三津ミツ郷ノにあてレ、

事を正し故に妊婦此村に稻を食へば彼に似て然る事此有るも有る。

故是味鉏高日子根命出后天

御梶日女命産給多伎都比古

命出時來坐多吉村而教曰汝

命御祖出向位也欲生此處宜

也詔矣神名槌山出西有高

丈周一丈許出石神亦側有百

餘許出小石神其所謂石神者

即多伎都比古命出御魂也早

乞雨時必令零也亦子鹽冶毘

コノミコトノマシレトコロアイフヤムヤトコノカミノミコヲ  
古命出坐處云止屋。此神生子。

マラスヤキタ 千 ヒ モリ オホ ホ ビ コノミコトト  
謂燒太刀火守大穗日子命。

天御梶日女命。おと誰神の御女と云おやも。御名義も未  
考得也。若くハ天石門別神此御女天津羽く神と同神  
み注を見べし。真竜の解み赤衾伊努大住日子佐別命と  
高日子根命とを同神とし。日子佐別命の后天甕津日女  
命と此の御梶日女命を同神  
を為とるむいとく非こせれり。○多伎都比古命。名義下  
ふ云はし。○多吉村ハ一本も多久村とあり。楯縫郡楯縫  
郷も在也。今は多久村と云やぞ。○教曰ハ多伎都比古命。

いほご生坐さび。御腹内も坐はし。詔ふれり。神功皇后の  
とき其御腹ある御子の生坐むとせし。石字御裳は  
腰も挿みて事竟て還らむ日。生坐せと詔へるよ同じ  
意む牙。○汝命ハ那賀美許登と訓はし。賀之の意あり。  
段の傳ふ。○汝命御祖也。此ハ御祖父母大國主神多紀  
注せり。○祖字一本も社とある。○向位ハ詳お  
理毘賣命を云はし。○向位ハ詳お  
らねど。多久村ハ邊ふ當昔御祖二柱の御屋ハ有らむ。○  
今御子産むと爲給ふ處也。其御屋も直ふ向へ依位おれ  
ば。此處もて産むを欲ふ。と詔へ依趣も通む。牟加比  
久良と訓はし。考の如くハ御祖神とちの御子多く  
て似給えむの御。ちて多伎都比古と申は御名ハ御祖母  
意もや有らむ。

此御名を取給りしるはし。多伎てふ地名に依るる  
依れるるまで。○カミナ神名樋山ヒノヤマ也。本書に。楯縫郡神名樋山郡家  
末あ依るべし。東北六里一百六十步。高一丈五尺。周、北一里一百八  
十步とあり。凡て出雲風土記に。神名備山と云山三所  
あり。出雲郡と此也。けり神奈備と云。岡部翁説に。神は毛  
理あり。毛理の約美ツギリミよる。神奈美カミナミあるを。通はして。備と云  
る。此とあり。委くは。第百二十段の然れど此山も。多伎  
都比古命ヒコノミコに坐社イマスある故に。かく名と依る也。出雲郡ある  
美高日子命ミタカヒコノミコ社あり。秋鹿郡あるを。佐  
太サタ大神オホカミ社の在字も。思ひ合はるべし。○一丈は。比登都ヒトツツ恵  
と訓はし。文ツキと云は。もと杖ツツを以て。物の長さを度ハカすしと

也。出と依名イハガミなり。委くは。景行天皇、卷○石神イハガミハ。伊波賀イハガミ微  
を訓べし。文徳天皇紀。齊衡三年十二月。此處に。常陸トコノ因鹿  
嶋イハガミに磯小依來坐る。大奈母知オホナモチ。少比古シヒコ命の御魂ミタマは石神イハガミ  
まよ能登オホノト。因羽咋イハノカ郡ノに坐る。大穴オホアナ持神モチカミ像石神イハガミ社ノ宿那彦スクナヒコ神  
像イハガミ石神イハガミ社ノあど有レハ。神像カミナあせる石イハふて。神は御魂ミタマの化れ  
依と聞ゆ依を。此コあるを高タカと云ひ。周シユと云るを思ふよ。神  
像カミナあせ也とは聞え。本ホと云曲有カマハ石イハ小。御魂ミタマ字留給  
りし物モノを通キえと也。風土記抄に。神名樋山。楯縫郷。多久村  
と也。高一丈。周一丈とある石神イハガミ也。多伎都タケツツ比古ヒコ命の御魂ミタマ  
を留給へ依イあるべく。百餘許ヒヤクニジュウコトの石神イハガミ也。從ツク奉る神等カミナ此  
よぞ有べき。けり風土記に。在イ神祇官カミナとあ依社イハガミに中ナカ。



多久社也云何也。抄み楯縫郷多久村大神名式も多久神

社と何依是あり。多伎都比古命也御社ある云も更

あ也。抄み今を大市祓大神と申候云依り付て真竜

懸津日女命と云も云。○鹽冶毘古命。鹽冶ハ地名の止屋

ふ依て。夜牟夜を訓ばし。字音を用とるあ也。御母ハ知

からび。名義もいまだ思得也。地名を神名よとりて負と

古命の亦名々と。○止屋を本書ふ。神門郡鹽冶郷郡家東

北六里阿遲須積高日子命御子。鹽冶毘古命坐之。故云止

屋。神龜三年改字塩冶と何也。和名抄も鹽冶と見也。風土記抄み

谷今市大津北者。武志大塚渡橋等以為。○燒太刀火守太

穗日子命。燒太刀は太刀も刃也云ぐ何まむ。火も係とる

發語あ也。万葉四小絶と云は。和備志みせむと燒太刀

乃隔付ふ事は幸くや吾君。岡部翁云。あを太刀ハ鞘を隔

ふ人の住里の近れま。十四小。夜岐多知乎刀奈美能勢伎

爾云。岡部翁云。こを多知乎と二十小。安佐欲比爾。禰能

未之奈氣婆。夜伎多知能刀其已呂毛安禮波。於母比加禰

都毛。岡部翁云。こを刃の利を人此心此敏。小云うけて。物

あり。那ぎ連と也。燒太刀としめ云は。太刀は燒刃して作

まむあ也。大祓詞。燒鎌乃火守を也。此神火を守賜ふ由

有めて負坐りむ。大穗とは。火の穗も依まる稱う。あふ第

五段出雲因阿菩大神のさて神名式ふ。神門郡よ。鹽冶日子命御子。燒太刀火守大穗日子命神社とあり。常の印本を脱し。大を天よ誤まり。此社を。今も火守神社を云とぞ。今を古本よ依て補へ。上田百樹云。今も出雲因造ハ別火ある。其火を天の火よ。今め傳子と云へ。ハ火守神ハ其火子由ある神。ハ不式よ。同郡よ。鹽冶神社。鹽冶比古神社。鹽冶比古麻由彌能神社。あど三社あり。風土記同郡よ。竝在神祇官と云る社の中よ。夜牟夜社と云グ三社あり。是を依べし。然依よ。燒太刀火守大穗日子命社と云は見え。不在神祇官とあり。依社等此中よ。塩夜社。火守社。同鹽夜社。を竝に載と。然まバ式あり。燒太刀火守大穗日子命神

社ハ。あの火守社を。風土記を進れる天平五年と。ハ後。官帳よ列られし。ハ。風土記抄よ。右六社。何をも塩谷王。朝倉大明神。石塚大明神。天津竜王。同所。辨戈天。あど申候と云へ。ゆ。

大因主神。亦娶邊津宮坐神。高

津比賣命。亦名神屋。而令生給

出子。積羽八重言代主神。次妹

タカテルヒメノミコトマタムトシ  
高照比賣命。亦將御合須佐出

ヲノミコトノミムスメヤ  
男命出御女。八野若比賣命而。

シメタミヒツクラヤラシトコロ  
令造屋出地云八野。亦娶高志

ノ又ナガハヒメノミコトニテ  
出沼河比賣命而。令生給出子。

マラスミホススミノミコトト  
謂御穗須須美命。亦名健御此

カミノマシマセルトコロ  
神出所坐出地云美保。亦子山

シロヒコノミコトノマシシトコロ  
代日子命出坐處云山代。即有

ホクラマタノミコワカフツ  
正倉亦子若布都主命出御狩

シマシシトキニオホヌノサトノ  
爲坐出時於大野鄉西山。令立

カリビトラテオハセル  
狩人而追出猪。至北山出河内

谷而。其猪出跡失焉。爾時自然  
哉。猪出跡失焉。詔出。故其處云  
内野矣。今云大野者訛也。亦此  
神。天御領田出長供奉而坐出  
郷云美談。即有正倉。此大國主

神出御子。凡有百八十一神矣。  
以十五柱爲珍子。而天下四方  
圀人等。令咸蒙恩賴矣。

邊津宮ハ。胸形の邊津宮あり。高津比賣命ハ即多岐都比  
賣命あり。此御事も既よ上よ見えとす。第三十六段の○  
神屋楯比賣命名義ハ。師云屋楯ハ彌高照の省と依ふ  
也。言代主神の妹よ。高照比賣命あり。御母  
の名と似とるおとハ。古傳よ例多り也。まとは楯ハ明

宮段大御歌ふ。娘子ヲトメを美ホメて。宇斯呂傳波ウシロハツナ袁陀氏ヲダシ呂迦毛ロカモと

をほせ給へる如く。姿スガタ字美稱ホメとる名小もや。阿波国勝浦郡事代主コトノハ積羽ツクハ

神社まゝ建島女祖命ツクシマメノミコト神社あり。○積羽八重言代主神ツクハヤハヒコトノハ積羽ツクハ

由ありげよ聞ゆ依故よ挙於。○積羽八重言代主神ツクハヤハヒコトノハ積羽ツクハ

を舊事紀ふ都味齒ツクシと御名比意を末よ注べし。第百十七段第百十七段此神の

あゝるよ依て訓べし。○高照比賣命タカテルヒメノミコト此御名を本書舊事紀此御名を高照高照

傳見るべし。○高照比賣命タカテルヒメノミコト此御名を本書舊事紀此御名を高照高照

あ依下照比賣をも古事記あ依下照比賣をも下光比賣下光比賣も作て二字と

もよ一字放ちて。氏流ウヂノリ借とる字ある故借とる字ある故高照姫タカテルヒメも

高光姫タカミツヒメとも有とも有むを傍むを傍と置と依を誤りてと置と依を誤りて二字共

小書とる小書とる某姫大神命某姫大神命と云こと例ありと云こと例ありまむ大神まむ大神二

字を決免て字を決免て行りて入御名比義下照比賣と申行りて入御名比義下照比賣と申比御名比御名

とるあり故今刪去於。御名比義下照比賣と申御名比義下照比賣と申比御名比御名

同く容貌カホの美麗キラクシキを云あるを云あるはし。地神本紀地神本紀此神を坐此神を坐倭

るを心得るを心得若くを由若くを由何何て。ちて三女神とて多紀理毘ちて三女神とて多紀理毘

相殿サウジおどよ坐おどよ坐はとよしはとよしもや。ちて三女神とて多紀理毘ちて三女神とて多紀理毘

賣命ウリノミコト狹依毘賣命ヒサヨヒヒメノミコト亦名市杵多岐都比賣命亦名市杵多岐都比賣命亦名高津と御

名を三よ名を三よ變カハに。三柱ミハしら小御身を分小御身を分に坐に坐おとも有おとも有まむまむ案案を

上上よ云よ云る如く。須世理毘賣命スセリヒメノミコト一柱一柱小坐小坐ませむませむ娶多紀理ムスビ

毘賣命ヒメノミコト而云而云。娶高津比賣命ムスビタカツヒメノミコト而云而云。と御名は替と御名は替とまど。

案は須世理毘賣命案は須世理毘賣命小御合小御合て生坐て生坐るる比比。是是小就小就て熟ツラク

思オモ子コバ。味鈕高日子根神アジノタカヒコネノカミと。言代主神コトノハと同神と同神。下照比賣タカテルヒメと。

高照比賣タカテルヒメとも同神とも同神よ。共共小須世理毘賣命小須世理毘賣命の生坐の生坐るる比比

比比けり。そそて此此比賣神比賣神ハ須佐之男スサノヲノヲ大神オホノカミ比御言比御言よ。嫡ウチ后ノミコと

るるおとあるおとあるを御子ミコ生給ナマて有有べきべきううた。大國主オホクニノミコト神カミ比御比御

さて、今此の傳ふ其は未だ言代主神を御父大神の御言  
辨ふるありと云。其は未だ言代主神を御父大神の御言  
ふも八重事代主神爲神之御尾前而仕奉則不有違神と  
詔するばうべ也。御稜威ある神あはれ。出雲風土記ふ餘  
御子神との事は多く見えとる。言代主神の事をて  
は一事ふれ。御名もかたて見え。まると高日子根神  
此事を。出雲風土記ふ多く傳ハ云。記紀ともふ。天稚日子  
段を見まは。高日子根神を御稜威いみじ神ある。皇  
美麻命の天降坐むと云る時。經津主神武甕槌神降賜  
ひて。大國主神よ問給ふ。言代主神よ問て。報命さむと  
白賜ひ。言代主神避奉り給へは後ふ。亦有可白子乎と問

せは。健御名方神あ。此を除て無し。と詔へるを思  
ふべし。高日子根神。言代主神と別神ふ坐まは。高日子  
根神ありと詔ハて有べき。是を以て同神あは事。我思  
ひ定む。是は依て考ふる。阿遲須根高日子命と申  
記ふ。此名をもて故事どもを語。言代主神と申。御名  
御名を皇美麻命。御國を避奉。賜ふ事。於て負坐る  
御名あり故。風土記ふ。天稚日子段。高日子根神と申  
ぞ有。依記紀とも。天稚日子段。高日子根神と申  
御名をもちて傳ふ。古傳の正きことをも辨ふべし。例  
を云は。天兒屋命。天思兼神。同神ある。常は兒屋  
命と申。御名をめて傳へ。思慮此事。用あは。兒屋  
思兼神を申。御名をもて。は。是を及て考ふ。下  
記し傳ふるをも思ふべし。照比賣。高照比賣同神あは。と。此ま論ひ。其を此

神の容貌ニカタチ此美麗キラレきを高照下照タカテルシタと對子タケて稱タケしカらむカ。そ  
迹ミ々ミ藝命の御名の天タカ然タカまタカむ高比賣タカヒメをもカあるカ。照タカてカふ  
饒ニギハヤヒ罔ニギハヤヒ饒ニギハヤヒあニギハヤヒどニギハヤヒ此類ニギハヤヒあり。然タカまタカむ高比賣タカヒメをもカあるカ。照タカてカふ  
言を落せるカ。誤カをカ依傳カありカ。多カ伎カ都カ比カ古カ命カと云カ。  
御名カも御祖母多紀理毘賣命の御名カもカりて負給へり  
と聞カもカまカバ多伎理比古と負賜ふべきカ。多伎都と負カる  
まカも多紀理毘賣多岐都比賣同神カある證カとカあカ依カべし  
御子阿遲須積高日子命坐葛城賀茂社カ。此神之神戸故云  
鴨カとあり葛城鴨社と云カ。神名式カも大和罔葛上郡小鴨  
都味波八重事代主神社とカ。勿言代主神の社味鉏高日  
何カる社のことあるカまカや。子根神カ此社カを別稱カ牙依カも就カても世カ此事識人カとち。右此  
事を考得ざカ。し故カふカいと胡亂カはしき説カ此み多加り。そ  
は末カ委カく辨カ牙注カふを見カと。第百十七段第百二  
十段の傳見カるべし。○八野

若日女命八カ屋カよカて野小屋カを造給へると云カ。負坐カる御  
名カあるカ。若カハ稱言カ小て例多し。此神ハ須佐之男大神。  
誰神カ小御合坐カて生カし久給カ子カる御子と云カ。あカと知カはカのら  
交カ。真竜カ也カ。神屋楯比賣命カと同神カ。ちカて夫婦御合坐カ依屋  
を造カるカ。あカと云カ。既カも注カ牙カ。第五段の傳見カるべし。○八野カ也カ。二柱神  
此住給カ子依屋を造れる野カあ依故カよ云カ。本書風土記カ。  
神門郡八野郷郡家正北三里二百一十步云カ。故云八野  
也カ。此カの云カくと約カとるカ。和名抄カも八野と作カ。風  
記抄カも八野カ。白枝カ。小ちて風土記同郡カ。在カ神祇官カを云カる  
山也カ。と見えカ。ちて風土記同郡カ。在カ神祇官カを云カる  
社の中カ。矢野社カとあ依カ。此カ女神カあるカ。抄カも矢野大  
明神と申カ。

と云今屋野村と云式子同郡子八野神社とある是れ也。或在り或書  
へ也。○御穂須く美命。健御名方神。お此二名義下小注ふ  
ばし。第百十八段の傳見べし。○美保ハ。風土記よ。嶋根郡美保郷郡家  
正東九七里一百六十四步。所造天下大神命。娶高志圀坐  
神意支都久辰爲命子。俾都久辰爲命子。奴奈宜波比賣命  
而令産神。御穂須く美命。是神坐矣。故云美保とあり。抄よ。関村。  
福浦西者森山。東者雲津諸食等。為三保郷。森山。舊曰横田。  
則在横田社。又三保灘。積十八町。東俗有言。島之神。処乃事  
代主神在。于此島。坎といへ。はと同郡。在神祇官とある  
也。社の中。美保社とあるは。神名式。美保神社をあるは。是  
也。風土記抄よ。斎三保郷。御穂須く美命。大  
穴持命。奴奈宜波比賣命。三坐とあり。まと不在神

祇官と云社の中。も三保社あり。抄よ。並記。事代主神。同  
誤也。○山代日子命。御名の義代ハ知れ。此意。て山を知給  
す。由あると有也。負坐る小也。圀名の山代を負給へる  
非也。本書小。意宇郡山代郷。郡家西北三里一百九步。所造  
天下大神大穴持命。御子。山代日子命。坐故云山代也。即有  
正倉とあり。抄よ。山代郷。竹屋八幡間。瀉矢田。津田。乃木。阿  
抄よ。意宇郡。手。奴伎。八村也。神明。樋山。麓也。といへり。和名  
小山代也。あり。○即有正倉と云。祠也。同郡。在神祇官  
をある社の中。山代社をあり。抄よ。山代郷。津田村。中。御  
神名式。山代神社とあるは。是れ也。○若布都主命。此也  
經津主神也。天より降也。圀巡給へ。依時小從給へ。謂



あぞ有しふや。布都の義末ふ云はし。神の下計三段。經津主、此傳見べし。

○大野郷を秋鹿郡あて。下見也。○追之猪オサシノイノとある犀カシを

行あり。そのみ有をや。二和名抄り。猪一名氣カ。和名井イとあり。

猪字を西土よて夫多てふ物よ用ふ字よて皇国よ謂也。

○北山之河内谷とて同郡よ。大野川源出郡

家正西一十三里磐門山風土記抄。磐門山。大野。南流入

于海と云川の河内あるはし。○其猪之跡失焉云く。獸ハ。

足跡を尋て追取る物れるよ。此處よ至て其跡見えば成

ぬるは自然哉云く。此御言を思ふふも尋常ヨソツネ此猪とて聞

え秘と。其由いほと考得カガ。神武天皇の熊野入坐る時

足柄山よ到坐る時よ。白鹿の出來れる。香坂王。忍熊王の  
宇氣比。獨し給する時よ。大猪出て香坂王を唯とるあど  
を善うらぬ例あれど。此○内野ハ。本書風土記よ。秋鹿郡  
はさる事とて聞えは。○内野ハ。本書風土記よ。秋鹿郡

大野郷。郡家正西一十里并歩云く。此約とる文を。即本故

云内野失ぬを内野と云るは。然今人猶誤大野號耳と

あて。和名抄よも大野とあて。風土記抄よ。合於大野村及

はて在神祇官とあは社の中よ。宇知社あて。抄よ。大野郷

和加布都怒志乃。神名式よ。内神社とあは是れゆ。○天御

命也といふゆ。領田之長ハ。阿米能美志呂陀乃加微を訓はし。

訓しう。後よあてア。此之外よ所見あはまど。試ふ云

は。大國主神。此御國よ御田を作て弘免給するよ。其

本を思召坐て。天照大御神オモホシ新嘗ニホナヒと獻給ふ。御稻の田を。  
殊カミよかく號ナツけて。此神を其御田ミミ比長カミよ依賜ヨシタマへるを云ふ。  
御領田ミミは。縣ノといふコト同じ。縣ノ上田の義あるコトと委タカく  
は。成務天皇卷マキ此傳コト注を見  
出雲郡美談郷郡家正北九里二百四十歩云ク。此約ヨクとる  
文ノ採ツキまシ。即ソレ彼神坐郷中故云ク。三大三ノ神龜三年ノ即有正倉  
依傳ノあり。和名抄ノも美談とあり。風土記抄ノも美談村ノ今  
とあり。在家村也。蓋出雲河東流後美談ノ今在家阻ノ為別村  
遂ノ今在家附出雲郡美談ノ三大三ノ師説ノ御田長ノ比由ノあり  
談ノ属楯縫郡といへり。三大三ノ師説ノ御田長ノ比由ノあり  
云ク。真龍解ノ見えと云フ。即有正倉ノの祠ノ同

記ふ。在神祇官とある社比中ノ彌太彌社ノとある是あり。  
神名式ノも美談神社とあり。次ノ縣神社同社。和加布  
都努志神社ノ並ニ並ニ舉ルらセと云フ。縣神社ノ。風土記ノ。阿我  
多社と出スと云フ。和加布都努志神社を舉ゲ依テ同社ト  
坐ス也ナリ。縣神社あるコト依テも御領田と云フ。縣ノ同  
雲ノ大河古ノイ努郷ノ西ノ大海ノ流れ入ルを寛永ノ  
郷ノ同社比賣ノ遲ノ社ノ縣ノ社ノ同ノ和加布都努志神社印波神社等  
共ニよ流レを失セて今ノ跡ノどノ知られぬコト抄ノも云フ。  
○大圀主神之御子云ク。百八十一神ノ。例の大凡比數を  
云フ。如ク聞クもシ。一神とちノ牙ノ云フへシバ。此ノ正ノ玄ノき數  
比傳ノあり。○以テ十五柱ノ云ク。大圀主神比御子神ノちノ御

名此見と依え。御井神。まゝ木俣神とも申は。御母味鋸高

日子根神。亦名ハ言代主神。まゝ高照比賣命。まゝ下照比

柱の御母ハ須世御穂須く美命。まゝ建御名方神とも申

山代比古命。若布都主命。この二柱ハ御母此六柱と

餘小御名も傳ら交。但し神名式ハ杵築大社の次ハ同

御子王江神社と云見え。意宇郡ハ大穴持御子神社。同社大穴持

あり。まゝと出雲郡ハ大穴持海代日古神社。大穴持海代日

女神社と百八十一神ハ中ハ十五柱を珍子と爲給へ也。

や有まむ。其十五柱ハ皆卓越とる功德の神等ハ坐ませ

依おと。言も更あ也。珍子とは。伊邪那岐大神ハ生給り

神の中ハ大御神と須佐之男神とを殊ハ珍子と爲給り

依ぐ如し。○天下四方固とを。天下ハ有也依。万此外固く

を云。○令咸蒙恩頼矣。は十五柱珍子神とちを。御固の

四方ある万固くハ班遣して。其固くを經營固免。種く此

事字も始し免て。其固人等ハ恩頼字蒙らし。給へるを

云。然まむ大固主大神ハ數の比賣神を呼ひ給り依事也。

御子多く生坐して。中ハ卓越と依字擇びて。此事ハ使ハ

給むと此御態あ也けり。例を云は。景行天皇大八島

の御心ありて。御子八十柱生し免賜ハ中ハ三王を太子

よ定賜ハ其餘ハ七十七柱の御子等を悉く固くの固造

和氣稻置縣主あども別依し賜へるが如し。まゝと甚く後

此事あがら。保元物語ハ源義朝臣思ふ旨ありて。男子

在、せむと為とるも、意は、はと此、ふ依て思ふ。漢籍佛書  
予似とり、思ひ合ふ。は、はと此、ふ依て思ふ。漢籍佛書  
を始、外、圀、の籍等。世、此、初、某氏、某天、おと云、神の  
出、其、圀、く、功、徳、成、せ、依、趣、の古、傳、も、數、見、ゆ、依、を、前、  
も、云、る、如、く、大、名、持、少、毘、古、那、神、及、此、お、る、十、五、柱、神、と、ち  
此、御、態、字、訛、傳、と、依、よ、ぞ、有、る、依、第九十四段の傳、抑、  
既、よ、云、る、を、見、べ、し、抑、  
諸、外、圀、の、開、闢、れ、る、事、趣、字、あ、く、よ、取、總、て、云、は、く、ま、お、最、  
初、ハ、天、津、神、と、ち、此、産、靈、ふ、因、て、レ、ホ、ナ、ウ、湊、沫、の、大、く、も、小、く、も、疑、  
成、ま、る、を、あ、此、事、也、第、九、  
段、よ、見、え、と、り、少、毘、古、那、神、天、降、り、て、造、固、坐、し、  
此、神、や、ぐ、て、宇、麻、志、葦、牙、比、古、遲、神、よ、て、い、と、早、く、外、圀、よ、  
放、ま、降、レ、給、ひ、レ、む、む、む、と、第、九、十、三、段、九、十、四、段、お、ど、の、傳、  
を、見、て、知、サ、然、ホ、ドる、間、よ、須、佐、之、男、大、神、五、十、猛、神、見、廻、レ、給、ひ、  
辨、ふ、べ、し、

此、神、と、ち、の、外、圀、を、見、巡、給、へ、る、事、由、也、御、圀、の、地、お、渡、  
第、六、十、七、段、よ、委、く、云、る、を、見、依、依、る、事、由、也、御、圀、の、地、お、渡、  
て、生、坐、依、御、孫、子、大、圀、主、神、此、圀、經、營、固、給、ふ、時、よ、少、  
毘、古、那、神、渡、來、坐、し、其、功、を、祐、タ、ス乃、て、此、圀、を、作、廻、レ、給、ふ、此、  
第、八、十、九、段、と、り、第、九、十、三、段、ま、で、を、見、て、知、ル、べ、し、其、間、お、大、圀、主、神、の、和、魂、大、物、  
主、神、外、圀、よ、渡、坐、し、多、造、給、ひ、少、毘、古、那、神、ま、と、外、圀、よ、還、  
給、レ、牙、依、後、レ、大、物、主、神、御、圀、へ、還、給、ひ、て、荒、魂、と、御、力、を、戮、  
せ、て、御、圀、を、經、營、給、ふ、第、九、十、五、段、第、九、十、六、段、  
此、傳、を、見、て、知、ル、べ、し、斯、カ、タて、大、圀、  
主、神、十、五、柱、の、珍、子、を、四、方、外、圀、よ、班、遣、ワ、カ、チ、ツ、カ、ル、し、て、經、營、ツ、ク、ラ、を、給、  
ひ、此、傳、は、ち、此、段、  
の、傳、是、れ、ち、レ、大、圀、主、神、現、事、を、皇、美、麻、命、お、避、奉、  
レ、て、杵、築、宮、お、長、ト、シ、よ、靜、坐、シ、て、後、レ、少、毘、古、那、神、の、渡、坐、ル、

○古史傳二十  
○五十一  
常世因よ其御靈を分遣ち給予め。其を共くお。外因くを造固給むむをぬるはし。然して少毘古那神の御靈と共ふ。其御靈の還來給予は。文徳天皇御世。齊衡三年十一月よぞ有る依。お此事文徳天皇紀よ見えて第九十四斯段の傳よ引て委く辨へさるが如し。て右此神等此御靈共くお御心を一び力を合せて。外因因を開き。其因人等よ御靈幸ひて。種々の事をも始ち。然て。其字悉く皇因お貢奉らあまふ。皇美麻命よ事依し。因戎治賜お御事此備とぞ爲給ふ依。此右注を説等の御世よ大加羅因より人渡り來まるををじ。仲哀天皇此御世よ神功皇后韓を征從へ給ひて。今よ至るまで外因くより其因産ども多よ持來て。慕寄り奉る有状を見通ちて思ひ辨ふはし。然るお其外

○古史傳二十  
○五十一  
因くと。參渡り來依事物の中よ。善のら然事物もまよ多加依え。外因くは。元と。神此生坐るれら。湊沫の凝成れる因お依故よ。惡死事も多加依はき理あるふ。此事九段の傳よ委く注へべき。況て皇美麻命御天降此時よ。經津主神。建御雷神まお天降坐して。豫母都因の穢ふ因て成と。伊豆速振惡神とちを。皆悉く。御因此地を逐ひ給ひし。は。其悉く外因くよ往々むあ。と炳し。外因くの籍等よいどいふ。枉くしき物のあまよ。通もる。此神等あるはし。然まむ此神とち此御魂よ依て。人心も非く。自然お邪ある道。惡き法ども多加依事は。然め有はき事あり。故種く此事物を貢奉るふい。

繼て彼神とちの心と起まる。妖しくしき法ども此傳て正  
 來るよ屬て。まよ邪お依蕃神も。あはと渡來正しうば。其  
 蕃神の心と。人此心そまよ率疑正。正志く豎よ行通ま依  
 神道を嫌ひて。舊て正齋ける神をおきて。其蕃神を齋き。  
 横お他と正入來お依法を尊ぶ。甚じ死枉事もぞ出來よ  
 け依。凡て正しき神とは。舊より皇國の古傳よ見えて。天  
 いひ正しき道とハ。天皇祖神とち此始給ひ行給ひ。御依  
 し坐ちて。豎よ通まる道字いふ。邪ある神と云ふ。邪の道  
 此古傳お見え。外國くとめ。参渡ま依神を云ふ。邪の道  
 とハ。天皇祖神の道と云異よ。横さまよ理字立る道くを  
 凡て云。そを他とめ。横よ入來れる道おま。バ。依り。是。其み  
 ぞ正邪の字義。まよ正邪とふ言の本義。依正。依。其み  
 依言もて行々。彼逐をまよ神此心お正かし。猶末々よ

注ふを見  
 依るし。

四百

大國主神。讓坐綾門。日女命出

時。女神不肯。逃隱出時。大神伺

求出處。於今云。宇賀。亦娶朝山

坐。眞玉著玉出邑。日女命而每

朝通坐矣。故云朝山。此二柱神者。竝神產巢日御祖命出御子也。亦子八尋銚長依日子命。此神出。詔吾御心平明不憤出地云。生馬亦子薦枕志都沼值命。

アサカヨヒマシキカレイフアサヤマトコノフタバシラノカミ

ハトモニカミムスビノミオヤノミコトノミコニ

マスマタノミコヤヒロホコナガヨリヒコノミコトコノ

カミノノリタヒワガミコノツトメテズトイカシカラシトコロラ

イフイコマトマタノミココモマクラレヅヌチノミコト

イフイコマトマタノミココモマクラレヅヌチノミコト

亦名天津。亦名高日子命。此神出坐郷云。漆沼。即有正倉。亦子支佐貝比賣命。亦子宇武賀比比賣命。此神化法吉鳥而飛度鎮坐出處云。法吉。亦子天活玉命。久魂命。

マタノミナハアマツキチコノカミノマシレサトライフ

カミタカヒコノミコト此ノカミノマシレサトライフ

シツヌトスナハチアリホクラマタノミコキサガヒヒ

メノミコトマタノミコウムガヒヒメノミコトコノ

カミナリホホキドリニテトボワタリシヅマリマシレトコロラ

イフホホキトマタノミコアマノイクタマノミコト

此者猪使連。恩智神主等出祖。

也。亦子天三降命。此者豐圀宇。

佐圀造出祖也。

綾門比賣命。御名此義未考得。大綾津日神の綾ハ禍の  
義あまど此御名此綾  
其義も有はらる。本書一本  
○讀を用婆比と訓べ  
し。字書ハ讀ハ讀を同字よ。順言謔弄曰讀ハ有り。  
此義も依まはる。意を見えぬ。言義ハ既ふ注へ。第九  
第十

段佐用婆比の。○不肯ハ。宇倍那波受と訓はし。聽入給  
下はるべし。

一十七里并五步云くとあり。此云くと約するハ此和名  
抄も見えと。風土記抄ハ以口奥宇賀為本郷并東南

宇賀郷也とあり。○真竜解ハ此神と下ある王の風土記  
邑日女命を同神と云ふ。いみじき非言なり。

同郡ハ。在神祇官を有る社の中ハ。宇加社あり。神名式ハ  
宇加神社とあり。是あり。○眞玉著玉之邑日女命。眞玉著

玉之は。玉てふ言を重ねて。玉此群ぐると係て稱する發  
語よ。邑日女と申せ。案の御名を聞えと。眞玉著ハ。

緒と抄ぐ。○朝山ハ。風土記ハ。神門郡朝山郷。郡家東南  
冠辞あり。



五里五十歩云々也。此云くと約するハ即和名抄も見えし。風土記抄南野尻當神朝山村併西馬木東宇奈手風土記同郡。在神祇官とある社の中。淺山社あり。式瀧大明神也といへり。右二柱比賣神とも。風土記。神魂命御子とあり。○亦子と。神魂命のあり。下皆同じ。○八尋鉾長依日子命。御名義。八尋鉾ハ長よ係と依發語あり。長を稱言依を余呂斯此約するあり。既ふ注。第三十七段の傳王依。吾御心。諸本よ御子とあり。今一本よ依まゆ。○平明不憤。都登米氏伊加麻志加良受と訓べし。眞龍云努力と

いふ詞。平明字を借り。今云平明と。朝を云朝を云。雄略天皇紀五年此處。靈鳥忽來鳴曰努力努力。と依を思ふ。努力不憤と云事あり。憤ハ字彙よ怒也。見え。新撰字鏡。恨恨伊加留。又加方加之とあり。今云。此注。伊加流。まよ加麻加麻斯とく當ま。俗ふ怒のほし。死を伊加米斯伎と云よ同じと云。此説よ依らむ。長依を。努めて憤給をける御心を稱美する御名。天皇紀。御心長田とけけ。万葉。御心吉野と連と依をも思合。○生馬ハ。風土記。嶋根郡生馬郷。郡家西北一十六里二百九歩。神魂命御子。八尋鉾長依日子命詔。

吾御心平明不憤詔故云生馬とあり。風土記抄より東西生

屋比津下佐田等之地也といへり。伊加麻斯加良受を詔へ依り依まる地

名あまむ。伊加麻と云はきを誤りて伊古麻と云ふれり。

和名抄よも生馬と見えたり。けり同郡に在神祇官といふ依社の中よ。

生馬社あり。抄よ祀於長依日神名式に生馬神社とあり。

是あり。風土記にはと不在神祇官とある社此中よも生

馬社あり。抄よ西生馬村大岩大明神也と云也。○薦枕志都沼值命。薦枕ハ

静寢と係と依發語あり。此發語のこをち第一段の沼を

委れをち寢あるべし。又若くハ主ふて静主。値を例の

男神を稱ふる言ふ。○天津枳値可美高日子命。枳値可美

此義未思得也。真竜ハ枳値を城築ツキの約チあり。可美

漆沼ハ。風土記に。出雲郡漆沼郷。郡家正東五里二百七十

歩。神魂命御子云く。故云志司沼。即有正倉と見

也。あの云くと約とるを。即和名抄よも漆沼と作也。風土

抄よ。以上直江村為。漆沼郷也といへり。けり風土記神名式ともふ。同郡よ。此

神の祠あらむを思ふを。未見當らば。○支佐貝比賣命。宇

武賀比比賣命。二柱此ことと既よ出と也。第ハ十一段の

○法吉鳥ハ。真龍説よ。風土記抄よ。法吉郷。合法吉。春日末

次。爲一郷。宇武賀比賣命。度坐所者。法吉村中。宇久比須谷

也と云也。然れど法吉を富く伎と訓て。營のあやぐ知ら

依。彼が囀サカリをもて名よ負オウせとるれ也。と云、依が如し。古今  
集物名よ。藤原敏行朝臣。心ココロのら花の雫シヅクよそぢぢ。宇  
具比須ウキヒスと此み鳥の鳴らむ。と有レを思シ牙ハば。宇具比須と云  
名も。鳴音小依オヒて負オヒと依オヒ也。和名抄和名抄よ。陸詞陸詞切韻切韻云。鶯ウ春  
宇久比須ウキヒス見え。万葉集万葉集よ。鶯ウ字を書カとれども當らざる  
と。古コ祀事識人祀事識人とち既ス不レ辨ハへて。宇具比須ウキヒス云。鳥ウかよ  
うく小漢土小漢土り。詳シ不レ知ラまざる鳥ウある由ユ云ヘり。まよ  
春鳥春鳥とも。黄鳥黄鳥とも書カけど。是もとく當タまゆとを思シまむ。  
はて此比賣神ヒメノカミの。此鳥ウよ化ナリて。飛渡りて法吉郷ホウキキノ静坐シヅカる  
事コト也。いのお依由オヒユとも今知シばらば。末スエよ櫛八玉ウシヤツ命ノミコトの鶉  
鳥ウと化ナリまるれど。其故コトと詳シあるを。此神コノカミの事コトは知ら  
まざるを口クチをし。後人ノチノヒトとく考カへて。決ツ然ズて幽カき由ユある  
し。○法吉ホウキキは。風土記フツキよ。嶋根郡シマネノ法吉郷ホウキキノ郡家ノ正西マシヨ一十四里ヒトヨシチリ

卅歩サウブ云々とあり。和名抄和名抄よも。法吉ホウキキと書カり。はて在ス神祇官カミヤとある社ヤシロは  
中ナカふ。法吉ホウキキ社ヤシロあり。抄シヨウよ。祭マツル宇武加比賣ウツカヒメ命ノミコト。法  
吉ホウキキ神社ヤシロとあり。是コトあり。○天活玉アメノイハヒ命ノミコト。御名ミナは義十種ヨシトシユ神寶カミタカラの  
中ナカよ。生玉ナマタマ。足玉タラシあり。此生玉コノナマタマの意イは稱ナヅケとるあらむ。三島ミヤジマ  
耳命ミミノミコトの女メよ。活玉ナマタマ依ヨ毘賣ヒメとい。○猪使連イソノミツネハ。神代本紀カムヤマトノムコトよ。生  
魂命イコトノミコト。猪使連イソノミツネ等ナリ祖ハハとあり。天神本紀アメノカミノムコトよ。天活玉アメノイハヒ命ノミコト。新田部ニノタテ  
直等祖ナオナリノハハとも見えとあり。猪使イソノミツネといふ姓ナリ他タふ所トコロ見ミ。○恩智神オンチノカミ  
主ヌシ也。姓氏録シヤクシ和泉国ニギハヤヒノクニ天神アメノカミ也。恩智神オンチノカミ主ヌシ。高魂命タカイコトノミコト。兒コ。伊久魂命イツクノミコト  
之後也ノチノコト也とあり。恩智オンチと。神名式カミナリノカタチよ。河内国カワチノクニ高安郡タカヤスノ。恩智オンチ  
神社ヤシロ二座ニイサ。並ナニ名神ナニノカミ。大月オホツキ次ツギ相嘗サヒナヒ新嘗ニヒナヒ也。あゝる社ヤシロを云イハふ。此社コノヤシロの神主カミヤは祖オヤと

依由あり。此社の事ハ、第三百三十四段此傳よ、委く注べし。○天、三降命。名義未考、得<sub>レ</sub>交。神代本紀ハ、天、八下、等とある。此、神名よ、因て、安よ、作れる神、名を、見とり。○豊国ハ、既よ、出と<sub>レ</sub>。第八段の。○宇佐、国を、豊前、国、宇佐、郡を、いふ。天神本紀よ、天、三降命、豊国、宇佐、国、造等、祖と見え。国造本紀よ、宇佐、国、造、檀原朝、高魂尊、孫、宇佐、都彦、命、定賜、国、造とあり。あ、不、此、国、造のことハ、神武、天皇、卷よ、委く、注ふを見べし。凡、此外よ、神名式よ、出雲、郡、杵築、大社、此、次よ、同社、神魂、御子、神社と云<sub>レ</sub>。其、御名、尤、知、法、くら、ば。

故其支佐貝比賣命爲將生佐

太大神ダノオホカミラ 亦マタ云マラス 獲サ田ダ 毘ビ古コノ大オホ神カミ 時トキニ  
マタ亦マラス 名ナ大オホ土ツチ 出イデ御ミ祖ヤノ神カミ 時トキニ  
ユミヤウセマシキソノトキニオヤキサガヒ

弓箭失坐矣。爾時御祖支佐貝

比賣命。吾御子。麻須羅神出子

坐則所出。出弓箭出来願給矣。

爾時角弓箭随水流出来。爾時

生坐出御子詔曰。此者非弓箭

也。詔而擲廢出。又金弓箭流出

來。即待取出坐而。闇岩屋哉詔

而射通出時。光加加明也。故其

處云。加加加賀鄉加賀神埼是

也。佐太大神出所坐也。即御祖

支佐貝比賣命出社坐此處。今

人行此窟屋邊出時。必聲確磕

而行。若密行則。神現而。飄風起。

行船者必覆也。

佐太大神。眞龍云。佐太ハ地名也。意宇郡の文也。狹田圀  
を御名ハ地をもて稱申せむ。案此御名ハ知グとし。  
熊野大神能義大神宇沙都比古。○猿田毘古大神。猿田  
宇沙都比賣也と申バゴとし。○猿田毘古大神。猿田  
佐田と訓バシ。猿を古ハ佐と此みも云バシ故也。借て書  
巴也見也。猿と猿ハ其は和名抄也。下總圀の郡名也。猿嶋  
佐之萬也。神名式也。參河圀賀茂郡狹投神社を同圀  
本圀帳也。坐加茂郡正一位猿投大明神と見也。今も猿投  
在てサナギともサナゲとも云あり。然まむ古く猿を佐也も云ふ也。炳  
し。故借て書るぬらむ。然るを古くも猿字の借字を依こ  
をを思ハざバしと聞えて。神代紀下也。此神ハ容貌を口

尻明耀云くと。猿の状も見ゆ。甚じき非也  
依あと。既も辨とるが如し。第百三十六段のちて此神や  
がて佐太大神を依由也。比古てふ言ハ有無のみ也  
違もて。全く同じ御名也。其を出雲風土記也。三所也。佐  
太大神と記し。神代紀也。猿田彦大神とみおのら名告ま  
し。古語拾遺。古事記も。皇美麻命の御詔也。猿田毘古大  
神と詔へ也。然まバ此ハ尋常也。大神を申バとを異也。大  
刺圀大神也。此類也。元々大神と申べき由ありて負  
賜ひらむ。是同神也。依べき一證也。○大  
土之御祖神と申バ御名の意也。既も注牙也。ちて此大土

神。やぐて猿田毘古大神ある由は伊勢国度會郡宇治山  
田此地主神と稱して祭れ依よ。此事も、去でよ第七十四  
段の傳よ云へり、お不神  
武天皇、卷の傳猿田毘古神。後小天照大御神を伊勢の狭  
をも見へし。  
長田伊須受之川上よ到坐むと云ひて。御自ハ。伊勢国よ  
鎮坐るよ符ひ。此事を、第百三十六段、第百四十段、第  
百四十二段、おどを見て知るはし。はと  
其御孫大田命と云を。宇治土公氏をいひ。此命垂仁天皇  
此御世よ。天照大御神を伊勢国宇治地よ待受奉まるお  
ぞを。合せ考子て知らる。猶その處よ注を見と。○弓箭  
失坐矣。おを弓箭失矣と有べき字。失坐矣とある字思ふ  
よ。此弓箭ハ御父神の御靈實と。齋賜へ依弓箭を聞えと

巴。三輪、大物主神此御魂の、丹塗矢よ化て、活玉依比賣を  
妊ませ、火雷命の御魂此、こまも丹塗矢よ化て、玉依日  
女を孕ませとるお  
ど、思ひ合まべし。斯て其御父神ハ。大歳神あり。其を大  
土御祖神。猿田毘古神。亦云、佐  
太、大神。同神あるおと。上よも下よ  
め注如くよて。大土御祖神ハ。大歳神の御子あるおと。既  
小見よ依如くおまをお也。第七十四段見るべし。猿田毘  
古、大神の御祖を、今まで都よ  
人の知らざりしハ。大土神と同神○麻須羅神之子坐則と  
あることを、知らざるよ依てあり。  
は。麻須羅を正心ふて。生依。御子。正心男お依神お坐む。  
を詔へるお也。おの麻須羅神を、父神よ  
係て心得むハ非あり。○願給矣ハ。即神  
小宇氣比給するお也。誓此事ハ既小上よ注子ゆ也。第三  
十二  
段の傳見○弓箭とを。角弭の弓箭お依はし。景行天皇、  
卷よ記せ

る角弭弓をもて堅魚を釣○此者非弓箭とは角弭此弓  
とる故事あり思合安べし○金と有まど黄金のおとよを非ばうち  
箭のいや志死字詔と依御言れ也○金弓箭を鐵弭の  
弓矢を依依し任せて加泥を云を鍊此こやあるよ金字  
字書ハ常陸風土記香嶋郡此下よ鐵弓二張鐵箭二具と  
見也○待取之とを流來るを遲しと待取給ふ也○射  
通ハ岩屋を也○光加く明也ハ氏理加く夜祁理と訓  
ぎし○故云加くは光加く明る故よ號と依由あり○加  
賀郷ハ本書風土記よ嶋根郡加賀郷郡家西北二十四里  
一百六十歩佐太大神所坐也とあり也抄よ加賀浦大蘆津  
抄よも加賀とあり也○加賀神埼も同記同郡よ加賀神埼即有窟高

一十丈許周五百二歩東西北通所謂佐太大神之也の也

此埼ハ郷の北よ在て窟ハ今も佐太大神の生坐る處也

云ひ傳ふぞ黑沢正恒と云人の大社記といふ物よ窟

櫓梶ふく潜て行こと速あり數十間往て東西小拔穴あり  
俗是字潜門をいふ窟中よて仰ぎて見まバ乳房の形あり  
ゆて水滴るおと絶び此海中の草此乳味よ潤ひを受く  
依よてゆて其味他方の草より旨しと云まよ此浦此女  
を皆うありて左乳房大なる此窟此乳房も左大  
依の故れゆ岩間の水此滴る岸う於波此ひひき樹魂  
よこふへ百千此雷此如し人の物言也詳あらび偶咳  
佐太人の山彦よあへて夥し棹此哥を哥牙よ十人此色  
あり此大神此竜馬を乗上給ひし処ありと云礮此岩  
上よ馬槽あり母所此人語らるハ此浦を加くを云り起  
浦牙半里加賀より水浦牙海上里あり此神窟よ正加賀  
泻も間近く見也細川玄旨法印の狂哥よ哀よもいまど



乳を吞む海士の子此加くのあよりや放まざるらむと  
訓ましと云り谷川士清此和訓葉よも衆妙集よ出雲因  
仁保の浦近き加くと云所此渾人此家ふとまりて哀よ  
もいまど乳を吞む云くせふ哥を何ばて加賀此潛戸と  
て海中子山あて岩屋此中真水字出は是乳水也  
云へりゆと大社此神の乳石とも云りと何正衆妙集と  
は玄旨法印の集あり加くの説云よも ○佐太大神所  
足絃どふるくかゆ諺も有しと見也  
坐也や才眞龍解ふ佐太社地才秋鹿郡の東堺加賀ハ嶋  
根郡此西堺よ屬て共よ大神此敷坐地あまむ大神所坐  
也と書と正と云正其社地ハ同郡よ神名火山郡家東北  
九里卅歩高三百卅丈周一十四里所謂佐太大神社即  
在彼山下也と見也抄よ神名火山之麓者所  
謂佐田大神社也とあり秋鹿郡よ在神  
祇官を何る社の中よ佐太御子社を何は是あ正抄よ佐  
田三社

其一社伊佐奈枳乃麻奈子熊野加武呂命一社神魂命御  
子枳佐加比賣命佐太大神一社迹、枳命伊佐奈弥命  
天照大神也神名式よは佐陀大神社と何正今本大字を  
と見えたり神名式よは佐陀大神社と何正今本大字を  
よ依て補へ正因史お貞規元年七月十一日出雲因從五  
位下佐陀神授正五位下同九年四月八日正五位下佐陀  
神正五位上同十三年十一月十日佐陀神從四位下おど  
見也枳築大社記お佐太社才佐太山の麓よあり八十八  
員隼人と云あり是才先驅者ありまよ社此前二町む  
りお田中社何ゆ天鈿女命何正と云正田中社ハ風土記  
よも見えて抄よ佐田宮内田中大神祭猿田彦命といへ  
正何おても佐太大神の猿田毘古大神あるよ由あり  
此社のおを才猶末よ注法し第百二十三段枳築宮 ○支  
佐貝比賣命之社は風土記嶋根郡よ在神祇官とあは社  
此中よ加賀社を何は是あ正抄よ加賀郷自灘磯神崎窟  
陸地謂窟戸大神名式よ加賀神社をあり今才加賀の潛  
神也といへり

○今人云々。眞龍云。此風土記の成まる天平此時の人も。昔此傳ふ依て。此窟此邊行く時を。必聲確磕志て行と記。其をゆ千年餘を經て。今人も此所を船乘以る時を。聲をろくして行れと云。○門人曾我常昌。及び田口慶成。田口慶秀ら云ふ。此卷を上木志て。世に弘むる者は。美濃国加茂郡越原村に住居る越原正蒿。まゝ同

彫工 木邨房義

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目

塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六冊 開題記五冊</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 光四卷</small>	六秩刻成	○古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>折本 箱入</small>	一帖	○同 <small>掛軸料</small>	一枚
○靈能眞柱	二卷	○神拜詞記	一帖
○太元圖說 <small>石摺</small>	一幅	○古道學神号 <small>同</small>	一幅
○弘仁歷運記考	二卷	○神字日文傳	二卷
○皇國度制考	二卷	○祝詞正訓	二卷
○天津祝詞考	一卷	○古道大意 <small>講本</small>	二卷
○皇典文彙	三卷	○童蒙入學門	一卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○鑿宗仲景考	一卷
		○古今妖魅考	三卷
		○大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
		○靜乃石屋 <small>同</small>	二卷
		○入學問答 <small>附著述 書目</small>	一卷
		○疑字篇 <small>日文傳 附錄</small>	一卷
		○万聲大統譜	一幅
		○玉多須喜 <small>二 帙</small>	十卷

○刻成書目

○全

○	鬼神新論	一卷	○	春秋命歷序考	二卷	○	出定笑語	三卷
○	悟道辨 <small>同</small>	二卷	○	伊吹於呂志 <small>同</small>	二卷	○	俗神道辨 <small>同</small>	四卷
○	大道或問	一卷	○	木匠祖神号 <small>石措</small>	一幅	○	德行式 <small>同</small>	一幅
○	立言文 <small>同</small>	一幅	○	武道祖神号 <small>同</small>	一幅	○	盤祖神号 <small>同</small>	一幅
○	赤懸歷代尺圖	一枚	○	荷田翁啓文	一卷	○		
○	宮比神御傳記	一卷	○	天滿宮御傳記略	二卷	○	日女島考	一卷
○	神字彙	一卷	○	古學二千文 <small>同鏡例</small>	一卷	○	草木撰種錄	一枚
○	神德畧述頌	一卷	○	古道訓蒙頌	一卷	○	叶古要略	一卷
○	喪儀略	一卷	○	葬事略記	一卷	○	石措類	數種
○			○			○		
○			○			○		

